

平成 22 年度事業報告

自 平成 22 年 4 月 1 日～至 平成 23 年 3 月 31 日

会長・理事 津 田 俊 隆

次期会長・理事	安 田 浩	理 事	今 井 浩	理 事	板 屋 義 夫
副会長・理事	原 島 博	理 事	大 石 進 一	理 事	横 矢 直 和
副会長・理事	小 柴 正 則	理 事	澤 田 寛	理 事	貴 家 仁 志
副会長・理事	中 嶋 信 生	理 事	安 達 文 幸	理 事	萩 本 和 男
副会長・理事	北 山 研 一	理 事	荒 川 薫	理 事	小 山 二 三 夫
理 事	中 沢 正 隆	理 事	酒 井 善 則	理 事	石 田 亨
理 事	江 村 克 己	理 事	持 田 侑 宏	監 事	羽 深 龍 二
理 事	桑 原 秀 夫	理 事	三 木 哲 也	監 事	村 上 篤 道
理 事	太 田 直 久	理 事	松 嶋 敏 泰		
理 事	三 宅 功	理 事	並 木 淳 治		

事 業 概 況

平成 22 年度は、新公益法人制度の施行に伴う新法人への移行検討を推進するとともに、企業会員の減少傾向に対する会員増強の取り組みをはじめとする学会共通の課題に対処するために企画室に設置した検討 WG を中心に、以下の取り組みを実施した。

なお、3 月 11 日（金）に発生した東日本大震災に対し、直ちに「東日本大震災で被災された皆様へ」と題した会長名でのお見舞いメッセージを発信した。また、3 月 14 日（月）から東京都市大学にて開催予定であった総合大会については、参加者の安全と交通利便性等を考慮して中止決定するとともに緊急理事会を開催し、規則第 8 条第 4 項を適用する決議を行い、被災会員への 2 年間の会費免除を決定、直ちにホームページ等で会告し、適用した。

（新法人法への取り組み）非営利型一般社団法人として申請する方針のもとに、法人法に準拠した定款変更（案）、規則変更（案）、代議員選挙規程（案）を作成し、本会ホームページにて公開、広く会員の皆様からの意見を募集するとともに内閣府公益認定等委員会の助言等に基づく加筆、修正を行った。これに基づき、①一般社団法人へ移行申請すること、②定款、規則の変更案及び代議員選挙規程案を第 85 回通常総会にて承認の後、速やかに、③設立時の代議員予定者を選出するための選挙を実施し、並行して、④平成 23 年度予算に基づく公益目的支出計画等の申請書を作成、年度内の移行認可を目標に申請する移行スケジュールを定めた。

（技術者倫理の検討）平成 10 年 7 月に施行された倫理綱領に対して、最近の急速な技術進歩等、学会内外の変化を考慮した倫理綱領改訂案及び行動指針案を作成し、本会ホームページにて公開、広く会員の皆様からの意見を募集した。その結果を織り込み「倫理綱領改訂案」と「行動指針案」を平成 23 年 2 月理事会にて承認し、同日、施行した。引き続き、関連する事例集、本会の「理念」の検討を行った。

（グローバル化への取り組み）海外会員が正員数の 10% 近くまで増加した本会は、電子情報通信及び関連する分野の国際学会として、更なる国際活動の強化、制度改訂を実施した。主に海外会員向けニューズレターとして情報発信している Global Plaza は、国際委員会及び国際企画タスクフォースが

中心となって毎月刊行した。また、今年度から役員等の選挙において、広く海外会員からも投票頂くこととした。

（Web システム改善の検討）会員等利用者の利便性の観点から、本会の Web システムを見直し、ID、PW を統一するシングルサインオン認証、会員情報連携などの機能を含めた Web 統合化システムの検討を推進した。RFP により開発業者を選定し、第 1 ステップとして、会員管理システム、論文公開システム等に対して ID、PW を統一する Web 基盤の改善開発を行った。今後、電子投票システムとしての活用、利便性の検証評価を行い、次期ステップ展開の検討を進める。

（企業向け学会価値向上策についての検討）主に企業の開発部門に所属する会員から見た本会の価値向上策として、以下の施策を実施した。① ICT 産業再発展に向けた産官学+学会連携シンポジウムを開催した。②国際的展示会 CEATEC JAPAN 2010 で本会研究会を併設開催し、約 830 名の参加があった。参加者の約 60% が非会員、更にその 70% が企業会員であり、企業向け情報発信に一定の効果が期待できることから次年度も試行することとした。③本会の情報発信機能の強化策として、「提言・会長声明等」の策定・公表プロセスを定め、これに基づき、学会名あるいは会長名で 4 件の提言・声明を発信した。

（ロードマップの作成）企画室内にロードマップ検討会を編成、本会分野に関する 2040 年までの「夢・ロードマップ」を作成し、日本学術会議のもと、他学会との連携を開始した。今後、理事会直下の常設委員会に発展させ、成果を広く社会に発信する。

（支部改革の検討）新法人への移行申請を控え、定款、規則等の変更による支部運営方法の変更、内部統制の徹底など、今後の支部のあり方について、支部担当理事を中心に各支部役員等をメンバーとする支部連絡会の場で議論、支部会計の決算主義への移行等を共通認識とするとともに、法人としての一体化運営をより明確にした。更に、「電気・情報関連学会連絡協議会」において支部連合大会等、経理面での改善策を協議、5 学会で方針を統一し、各支部で改善実施した。

その他の本部活動として、シニア会員制度の本格実施、マイページの機能拡充などの会員サービスの向上、並びに教育活動の展開に継続して取り組み、ソサイエティ活動では、情報オンライン化の本格実施を含め、利用者利便向上の活動を

強化した。以下に項目別の実施の概要を記す。

(1) 会員サービスの向上に関して：

- 平成 21 年 4 月から試行実施した図書館等特殊員への和英オンラインジャーナルのサイトライセンス制度について、平成 24 年度から本格サービスに切り替える決定を行った。
- 次期総合版ハンドブック（知識ベース）については、一部準備が整った編から会員に対してβ版の公開をしてきたが、3月から一般公開を開始した。
- ID、PW を統一するシングルサインオン認証機能によりマイページの利用者が増加することが期待されることから、興味分野登録機能を改善するとともに、シニア会員申請リンクなどの機能を拡充した。また、CEATEC-Japan2010 併設開催研究会に参加した非会員を含む情報提供希望者に、研究会からの情報発信サービスを実施した。本人経歴（役職履歴、受賞履歴など）の掲載、各種申請など、更なる機能の充実を図り、会員サービスを向上する。
- 海外会員及び外国人会員に対する会員制度の見直しの一環として、正員（海外）の呼称を廃止し、海外会員に対する割引制度を明確にする規則の変更を行った。
- 男女共同参画委員会は、昨年に続いて平成 22 年 9 月のソサイエティ大会会場に託児施設を開設して、女性会員が積極的に学会活動に参加できるように利便を図った。

(2) 教育活動に関して：

本会の教育活動の充実を図り、その活動を束ねるために組織された「教育活動協議会」のもとで、教育活動関係の 4 委員会（生涯教育委員会、アクレディテーション（Accreditation Policy Council）委員会、CPD（Continuing Professional Development）委員会、小中高生科学教室委員会）が以下の活動を展開した。

- ①先端オープン講座の実施、② JABEE の学部認定審査及び JABEE 審査講習会の開催、③ CPD 会員システムの本格運用と資格ランクの設定、④青少年の科学離れを阻止するための「子供の科学教室」活動の実施。

(3) ソサイエティ関連活動に関して：

- 基礎・境界ソサイエティでは、新電子論文誌 Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE（略称 NOLTA）を予定どおり平成 22 年 10 月に創刊した。以降、順調に季刊発行している。
- 通信ソサイエティでは、技報オンラインサービスを本格実施し、また、大会コンテンツを Web 閲覧できる「CS アーカイブス」のサービスを継続実施した。
- エレクトロニクスソサイエティでは、1997～2007 年度の技術研究報告を検索・閲覧、ダウンロード可能なサービスの試行運用を継続した。
- 情報・システムソサイエティ、ヒューマンコミュニケーショングループ関連では「FIT（Forum on Information Technology）：情報科学技術フォーラム」を情報処理学会と合同開催した。

以下に各事業の実施状況を報告する。

I. 本 部 事 業

1. 出版に関する事項

1.1 会誌の発行状況（定款 第 6 条イ）

全会員に共通の場として重要なメディアである会誌は、平成 22 年 4 月から 23 年 3 月まで 12 冊、合計 379,000 部（月平均 31,583 部）を発行配布した。

平成 22 年度の会誌記事の内容・件数及びページ数は次のとおりである。

種 類	件数	ページ数	種 類	件数	ページ数
講 演	1	6	解 説	31	187
4 月小特集	7	35	講 座	15	92
(IP 網トラヒック計測)			寄 書	2	9
5 月特集 (超臨場感コミュニケーションの近未来像)	16	73	回 想	1	4
6 月小特集 (新世代通信技術を見据えたメタマテリアルの現状)	7	33	学生／教養のページ	13	39
8 月小特集 (グリーン ICT に向けた光ネットワーク技術)	10	45	オピニオン	3	10
9 月小特集 (ビジョンコンピューティングにおける確率的情報処理の展開)	8	36	ニュース解説	19	32
10 月特別小特集 (電磁波で紡ぐ北陸の自然と伝統・先端技術) (北陸支部)	8	24	総合報告	2	35
11 月特集 (エレクトロニクスの多様化を支える新デバイス技術—2020 年を見据えて—)	17	81	ソサイエティのページ	2	6
12 月小特集 (新たな時代に対応した電波伝搬技術の国際標準化活動)	7	27	男女共同参画のページ	0	0
1 月特別小特集 (情報通信分野のグローバル化にどう取り組むべきか?—外から見た我が国の ICT 産業と R&D への期待—)	7	29	学生会報告	2	13
1 月小特集 (電波資源の有効利用を図るコグニティブ無線)	5	17	支部だより	2	2
2 月小特集 (次世代フォトリソグラフィ技術の実現に向けた研究開発の最新動向)	7	35	予 定 目 次	11	—
2 月小特集 (工学教育今昔)	3	24	学会ニュース	0	0
2 月号小特集 (これからの医工連携)	8	48	慶 賀	0	0
特別企画シンポジウム	1	7	追 悼 抄	3	3
			国際会議	22	2
			図 書 紹 介	24	12
			国内文献目次		
			図書寄贈一覧		6
			本会だより		21
			編 集 室		12
			役員等口絵		8
			総会・選奨		71
			フェロー口絵		2
			会誌総目次		11
			学会編集室		7
			報 告		0
			計		1,104
			卷 頭 言		12
			目 次		36
			会 告		668
			論文誌目次		126
			合 計		1,946

*その他：広告（カラー、前付、後付等）165.5 ページ

1.2 広告賞（定款 第 6 条イ）

平成 22 年広告賞として下記の 2 点を選定した。

- 【カラー広告部門】 (株)インタフェース
「長期安心 FA コントローラ」 (2～4, 9, 10 月号)
- 【一色刷り広告部門】 (株)オーム社
「Ohmsha books information!」 (1, 2, 4～6, 9, 11 月号)

1.3 ハンドブック（定款 第 6 条ト）

(第 8 次) ハンドブック／知識ベース委員会において、次期総合版ハンドブック（知識ベース）会員限定β版について順次アップロードを行い、β版での公開後 3 か月を経過した一部のコンテンツを対象に、一般公開を開始した。

また、完成を目指して内容検討を行うとともにコンテンツの単行本化についての検討を開始した。

1.4 単行本（定款 第 6 条ト）

平成 22 年度は新刊 4 点 4,200 部、重版 4 点 1,400 部を発行した。

新刊書は次のとおりである。

新刊書名	判型	発行年月日	ページ数	部数
会議・プレゼンテーションのバリエーション―“だれでも参加”を目指す実践マニュアル―	A5	H22.4.20	210	1,200
通信ネットワークの信頼性	A5	H22.5.10	186	1,000
ネット社会と本人認証―原理から応用まで―	A5	H22.8.20	208	1,000
無線分散ネットワーク	B5	H23.3.25	224	1,000

1.5 教科書「電子情報通信学会大学シリーズ」(全59巻) (定款 第6条ト) (コロナ社委託出版)

昭和55年8月以降既刊書目52点、平成22年度は重版5点を発行した。

1.6 教科書「電子情報通信レクチャーシリーズ」(全65巻) (定款 第6条ト) (コロナ社委託出版)

大学院及び学部の学生を対象とし、併せて一般勉学者の参考に供するための新シリーズの教科書として平成22年度は新刊1点、重版4点を発行した。

新刊書は次のとおりである。

新刊書名	発行年月日	ページ数	部数
電子回路	H22.8.5	190	1,000

(平成14年3月第1回配本以降通算25点)

2. 会議に関する事項 (定款 第6章)

2.1 第84回通常総会

平成22年5月22日(土)午後2時から機械振興会館において第84回通常総会を開催した。社員総数173名に対し、出席社員数126名(委任状を含む)で、定款第45条に定める社員総数の過半数の出席に達した。青山会長を議長として下記議案を付議して、いずれも原案どおり可決承認した。

平成21年度事業報告について

平成21年度収支決算報告について

平成22年度事業計画(案)について

平成22年度収支予算(案)について

2.2 理事会、評議員会

年度内に8回の理事会を開催し、うち3回を評議員会と合同で開催した。

2.3 支部長会議

平成23年3月15日(火)に開催予定であったが、3月11日の東日本大震災の影響を考慮し、中止した。

2.4 海外セクション代表者会議

国際委員会は海外セクション代表者8名が、各セクションにて講演会等を企画・実施することに協力するとともに、本会活動の周知・宣伝に努めた。なお、海外セクション代表者会議は、平成23年3月16日(水)に開催予定であったが、3月11日の東日本大震災の影響を考慮し、中止した。

各セクションにおいての講演会等の実施件数は次のとおりである。

セクション	件数	セクション	件数
バンコク	1	韓国 (Information)	0
北京	1	上海	1
韓国 (Communication)	1	シンガポール	2
韓国 (Electronics)	1	台北	1

3. 規格調査会に関する事項 (定款 第6条ニ)

委員会会議を4回、専門委員会及び小委員会を75回開催した。国際標準化に関して取り扱ったIEC文書は287件であった。

委員会名		委員長名	委員数		開催数	
規格調査委員会		三木 哲也	16		4	
	専門委員会名	専門委員長名	専門(委)	小(委)	専門(委)	小(委)
1	電気・電子技術分野のメタデータライブラリ	堀内 一	0	22	0	4
2	通信用伝送線及びマイクロ波受動部品	小林 禰夫	11	42	4	7
3	周波数制御・選択・検出デバイス	関根 好文	22	36	3	6
4	光ファイバ	川瀬 正明	20	65	4	20
5	デザインオートメーション	神戸 尚志	16	35	5	5
6	無線通信送信装置	小川 博世	17	23	1	9
7	電子通信用語	吉村 久乗	24	0	0	0
8	電子通信記号	—	14	0	0	0
9	安全規格検討委員会	鈴木 喜久	10	0	7	0
合 計			150	223	28	51
			373		79	

4. 選奨に関する事項 (定款 第6条ホ、ヘ)

本年度の各選奨は所定の手続きによって選考が進められ、次のとおり各受賞者を決定した。

4.1 功績賞 (第72回)

青山 友紀 (慶大)
秋葉 重幸 (KDDI研)
岡本 龍明 (NTT)
白鳥 則郎 (東北大)
高橋 達郎 (京大)

以上5名

4.2 業績賞 (第48回)

選奨規程第9条イ項によるもの

(業績名五十音順)

業 績	貢 献 者 (所 属)
大容量光伝送を実現するための多値位相変調用LN光変調器の先駆的研究	田中 一弘 (富士通研) 土居 正治 (富士通オプティカルコンポーネンツ) 杉山 昌樹 (富士通オプティカルコンポーネンツ)
長波長帯半導体レーザに関する先導的研究	荒井 滋久 (東工大)
複素誘電率の高精度測定法の提案とそのマイクロ波応用技術の確立	小林 禰夫 (埼玉大)

以上3件

選奨規程第9条ロ項によるもの

(業績名五十音順)

業 績	貢 献 者 (所 属)
FTTH用1.25Gb/sバースト光送受信インタフェース技術の実用化開発	本島 邦明 (三菱電機) 田上 仁之 (三菱電機) 中川 潤一 (三菱電機)
動的再構成プロセッサの研究開発とその画像処理機器応用	本村 真人 (NEC) 栗島 亨 (ルネサスエレクトロニクス) 藤井 太郎 (ルネサスエレクトロニクス)
光ファイバ接続技術の開発	杉田 悦治 (白山製作所) 佐武 俊明 (US Conec Ltd.) 加島 宜雄 (芝浦工大)

以上3件

4.3 論文賞 (第67回)

(分冊別掲載年月順)

A	論文名	The Vector Decomposition Problem
	著者名	吉田真紀 (阪大), 光成滋生 (サイボウズ・ラボ), 藤原 融 (阪大)
	掲載年月	平成 22 年 1 月号 (EA)
A	論文名	A Direct Conversion Receiver Adopting Balanced Three-Phase Analog System
	著者名	山路隆文・上野武司・板倉哲朗 (東芝)
	掲載年月	平成 22 年 2 月号 (EA)
A	論文名	Strongly Secure Privacy Amplification Cannot Be Obtained by Encoder of Slepian-Wolf Code
	著者名	渡辺 峻 (徳島大), 松本隆太郎・植松友彦 (東工大)
	掲載年月	平成 22 年 9 月号 (EA)
B	論文名	A New User Selection Measure in Block Diagonalization Algorithm for Multiuser MIMO Systems
	著者名	工藤理一・鷹取泰司・西森健太郎・太田 厚 (NTT), 久保田周治 (芝浦工大), 溝口匡人 (NTT)
	掲載年月	平成 21 年 10 月号 (EB)
B	論文名	Evaluation of Free-Riding Traffic Problem in Overlay Routing and Its Mitigation Method
	著者名	長谷川 剛 (阪大), 平岡佑一朗 (NEC), 村田正幸 (阪大)
	掲載年月	平成 21 年 12 月号 (EB)
B	論文名	協力スペクトルセンシングを用いたコグニティブ無線システムの開発と屋外伝送実験
	著者名	村田英一・大野卓人・山本高至・吉田 進 (京大)
	掲載年月	平成 22 年 7 月号 (B)
C	論文名	遅延制御による偶数段リング構成ダイナミック 1/4N 分周器
	著者名	野坂秀之・小杉敏彦・西川健二郎・豊田一彦・村田浩一 (NTT)
	掲載年月	平成 22 年 2 月号 (C)
C	論文名	A Transformer Noise-Canceling Ultra-Wideband CMOS Low-Noise Amplifier
	著者名	木原崇雄・松岡俊匡・谷口研二 (阪大)
	掲載年月	平成 22 年 2 月号 (EC)
C	論文名	Compact and Athermal DQPSK Demodulator with Silica-Based Planar Lightwave Circuit
	著者名	那須悠介・坂巻陽平・服部邦典・亀井 新・橋本俊和・才田隆志・高橋 浩・井上靖之 (NTT)
	掲載年月	平成 22 年 7 月号 (EC)
D	論文名	基本対称関数に基づく節をもつ CNF 論理式の充足可能性判定
	著者名	馬野洋平・酒井正彦・西田直樹・坂部俊樹・草刈圭一朗 (名大)
	掲載年月	平成 22 年 1 月号 (D)
D	論文名	Multi-Context Rewriting Induction with Termination Checkers
	著者名	佐藤晴彦・栗原正仁 (北大)
	掲載年月	平成 22 年 5 月号 (ED)
D	論文名	メモリベースパーティクルフィルタ：状態履歴に基づく事前分布予測を用いた頑健な対象追跡
	著者名	三上 弾・大塚和弘・大和淳司 (NTT)
	掲載年月	平成 22 年 8 月号 (D)

((A), (B), (C), (D), (E), (EA), (EB), (EC), (ED)) : 英文誌 所属 : 掲載時の所属) 以上 12 編

4.4 喜安善市賞 (第4回)

論文名	メモリベースパーティクルフィルタ：状態履歴に基づく事前分布予測を用いた頑健な対象追跡
著者名	三上 弾・大塚和弘・大和淳司 (NTT)
掲載年月	平成 22 年 8 月号 (D)

((D) : 和文誌 所属 : 掲載時の所属) 以上 1 件

4.5 学術奨励賞 (第73回)

基礎・境界ソサイエティ : 8 名

(五十音順)

候補者	所属	題 名	大会別	講演番号
Valdivieso Chian Alex	阪大	A Cooperative Learning Method for the Group Control Problem in Multi-Car Elevator Systems	総合	AS-3-5
池田裕司	KDDI 研	CDMA 2000 1x EV-DO ソフトウェアのマルチコア DSP への実装	総合	AS-2-1
梶原弘治	摂南大	強化学習に基づく最適スーパーバイザ制御の一般化に関する検討	総合	A-12-8

黒田佳織	埼玉大	Transforming spike sequence to continuous time series to estimate neural network structure	総合	A-2-21
		A method for transforming marked point process to continuous time-series	ソサイエティ	A-2-3
篠原悠樹	山口大	抑止アーク付きワークフローネットに対する健全性判定の一考察	ソサイエティ	A-12-3
利光弘企	千葉大	微小病変組織抽出のための超音波 3 次元統計フィルタの設計	ソサイエティ	AS-2-1
奈良竜太	早大	RSA 暗号に対するスキャンベース攻撃の評価実験	ソサイエティ	A-3-6
平田慎之介	電通大	2 波の線形周期変調信号を用いた超音波距離・速度計測におけるドップラシフト補償の距離精度に関する検討	ソサイエティ	AS-2-6

通信ソサイエティ : 38 名

候補者	所属	題 名	大会別	講演番号
Pitakdumrongkija Boonsarn	NEC	Effect of backhaul resource allocation on downlink performance of LTE-A Type 1 relay network	総合	B-5-11
		Effects of LTE-Advanced Type 1 relay node positions on downlink performances	ソサイエティ	BS-2-15
飯澤洋平	NEC	マルチドメインネットワークにおけるドメイン規模の実験的考察	総合	B-7-73
井川英哲	三菱電機	PreBias タイミング制御 IC を適用した対称型 10G-EPON ONU 用光送受信器の開発	総合	B-10-46
石原 哲	NTT ドコモ	人体通信時における植込み型デバイスへの励起電圧測定	総合	B-4-49
		BAN 機器の植込み型デバイスへの電磁干渉評価法検討	ソサイエティ	B-4-11
稲森真美子	慶大	ダイレクトコンバージョン受信機の周波数軸 IQ インバランス推定における周波数オフセット補正量の検討	総合	B-17-25
井上高道	NEC	下りリンク CoMP single user-MIMO におけるランクのスループット特性への影響	ソサイエティ	BS-2-10
衣斐信介	阪大	通信路ネットワーク直列接続適応符号化伝送の EXIT 解析	総合	B-5-32
加藤泰典	三菱電機	Clip & Filtering による PAPR 低減における帯域内 SINR 改善の一検討	総合	B-5-73
金子 慎	NTT	電気段空間符号拡散に基づく周波数領域 O-CDM における多元接続干渉の低減	総合	B-10-47
		電気段空間符号拡散に基づく周波数領域 O-CDM における周波数利用効率向上	ソサイエティ	B-10-45
萱野良樹	秋田大	A Study on EM Radiation from Stripline Structure with Gapped Plane	総合	B-4-2
		A Study on EM Radiation from Stripline Structure with a Thin Wire	ソサイエティ	B-4-48
河野太一	NTT	符号化映像を対象とした No Reference 型メディアレイヤ映像品質評価モデルの有効性検証	総合	B-11-8
		No reference 型客観評価法で用いる符号化ブロックサイズ及び境界線位置推定技術に関する検討	ソサイエティ	B-11-6
岸田 朗	NTT	複数端末存在下での無線モバイルルータにおける干渉回避技術	ソサイエティ	B-5-149
國方篤史	NTT ドコモ	屋内偏波 MIMO の実験によるチャネルパラメータ評価	ソサイエティ	B-1-28

古 博	早大	Pricing of Wireless Access Network Using Second-Price Auction Protocol	総合	BS-3-11
		Pricing of Wireless Local Access Network by Considering Compensation for Collisions	ソサイエティ	BS-7-8
小竹論季	三菱電機	3D Imaging LADAR を用いた目標検出アルゴリズムの開発	総合	B-2-47
		3D Imaging LADAR 用目標検出アルゴリズムの改良	ソサイエティ	B-2-5
小頭秀行	KDDI 研	通信イベント発生時における社会ネットワーク構造の分析	総合	B-7-6
		携帯電話による音声通話と Eメールのトラフィックに現れる通信先次数分布についての考察	ソサイエティ	B-7-33
今野佳祐	東北大	CG 法によるモーメント法解析におけるブロック対角化前処理の効果	総合	B-1-172
佐々木 力	KDDI 研	複数携帯キャリア間でのデータ通信品質比較に関する一検討	総合	B-16-8
		マルチキャスト木のリアルタイム監視の効率化に関する一検討	ソサイエティ	B-16-7
白壁将成	NTT ドコモ	LTE 下りリンクにおける Distributed 送信適用時の VoIP トラフィック容量評価	ソサイエティ	B-5-30
杉崎大輔	東京電機大	OFDM 信号伝送型 UWB 時空間チャネルサウンディングの室内環境における実験の評価	ソサイエティ	B-1-38
関 剛志	NTT	3D-MEMS 光スイッチ+WSS による光クロスコネクタを用いたカラーレス、ディレクションレスマルチリング伝送実験	総合	B-10-33
		マルチプロトコル光クライアントインターフェースを有したカラーレス・ディレクションレスハイブリッドクロスコネクタノード	ソサイエティ	B-10-53
武田和晃	NTT ドコモ	LTE-Advanced 下りリンク OFDMA 無線アクセスにおけるマルチレイヤ参照信号用直交符号のマッピング法に関する検討	総合	B-5-3
		LTE-Advanced 上りリンクにおけるブロック拡散および巡回シフト CDMA を用いる ACK/NACK 信号送信法の特性比較	ソサイエティ	B-5-4
谷口健太郎	東芝	近接ミリ波通信に適した方式提案 (2) 一無線 IC の機器内蔵環境における 60 GHz 帯伝搬特性解析	総合	B-5-147
土田幸寛	古河電工	大 Aeff 型ホーリーファイバのマイクロバンド損失低減に関する検討	総合	B-13-21
		Aeff 拡大型ホーリーファイバを用いた分散ナレッジメント線路の検討	ソサイエティ	B-13-9
長坂正史	NHK	21 GHz 帯衛星放送における受信アンテナ放射パターン	ソサイエティ	B-1-164
中村聖平	三菱電機	地上デジタルテレビ放送波を用いたパッシブ逆合成開口レーダ方式フィールド実験結果報告	総合	B-2-68
		合成開口レーダ画像間のコヒーレンス低下要因の検討	ソサイエティ	B-2-4
中本藤之	三菱電機	RF 部品の電源に対するイミューニティレベルに関する検討	総合	B-4-18
		RF 部品のノイズ耐性に関する検討	ソサイエティ	B-4-28
流田理一郎	KDDI 研	IR 合成を行う HARQ および適応変調を用いたセルラシステムにおける受信 SINR の平均および標準偏差を用いたスループット推定法	総合	B-5-89
長谷川文大	三菱電機	タイミングオフセットに耐性のある時間変動伝送路対応 MLSE 等化器	総合	B-5-102
		疎なマルチパス伝送路に対応した最尤検出の一検討	ソサイエティ	B-5-64

原田浩樹	NTT ドコモ	周期定常性に基づく反復型特徴検出法の複数信号識別特性評価	総合	B-17-17
		OFDM 信号に対する周期定常性付与方法の拡張に関する検討	ソサイエティ	B-17-23
平井理宇	日立	光多値信号の OSNR 感度のレーザー線幅依存性の検討	総合	B-10-78
		単一偏波・直接検波 107-Gbit/s 16APSK 伝送と符号間干渉の解析	ソサイエティ	B-10-68
樊 昕昱	NTT	全偏波 PNC-OFDM における光線路の微小曲げ検出	総合	B-13-14
		陸上光線路距離に適する高 PMD 区間識別法	ソサイエティ	B-13-42
松中隆志	KDDI 研	ユーザ主導サービスプラットフォームにおける複数ユーザ間での Personal Network 制御手法の考察	総合	BS-4-5
		ユーザ主導サービス構築プラットフォームにおける Personal Network 内鍵共有手法の評価	ソサイエティ	B-15-10
村上友規	NTT	次世代無線 LAN における空間リソース割り当ての特性評価	総合	B-5-134
		次世代無線 LAN の屋外環境における空間リソース割り当て特性評価	ソサイエティ	B-5-116
柳 崇	三菱電機	低軸比特性を有するキャビティ装荷 4 点給電広帯域円偏波 MSA の試作結果	総合	B-1-146
		L 字型プローブにより励振される円偏波キャビティアンテナの検討	ソサイエティ	B-1-143
山岡敦志	東芝	広帯域信号における直交変復調器の誤差推定方法の特性評価	ソサイエティ	B-17-17
山口一郎	東北大	大規模ネットワークローミングのための Shibboleth を用いた代理認証システム	総合	BS-7-1
山本伸一	三菱電機	超マルチビーム通信衛星におけるアレー給電反射鏡アンテナの給電アレー位置の検討	総合	B-3-8
		超マルチビーム通信衛星向けアレー給電反射鏡アンテナの励振条件の比較	ソサイエティ	B-3-17

エレクトロニクスソサイエティ：14 名

候補者	所属	題 名	大会別	講演番号
足立光一朗	日立中研	1.3 μm 帯レンズ集積型面出射レーザの広温度範囲 25Gbps 直接変調動作	ソサイエティ	C-4-1
大畠伸夫	三菱電機	10G-EPON ONU 用光モジュールの開発	総合	C-4-31
桂井宏明	NTT	4 ch × 10 Gb/s パラレル位同期アーキテクチャと位相調整回路	総合	C-12-55
金澤 慈	NTT	差動駆動直接変調 DFB レーザによる 25Gb/s 動作	総合	C-4-27
		100 GbE 用 EADFB レーザアレイモジュールの低電圧動作	ソサイエティ	C-4-3
桑田英悟	三菱電機	11 W 出力バランス型 C-X 帯広帯域 GaN HEMT 増幅器	ソサイエティ	C-2-20
幸丸竜太	三菱電機	UHF 帯 BRFB 装荷型帯域可変 BPF	総合	C-2-13
		スイッチ切替により複数の周波数帯で動作可能な帯域可変フィルタ	ソサイエティ	CS-4-9
五明克規	東北大	20-60 GHz 帯 広帯域 CMOS オンチップ サスペンデッド結合パラン	ソサイエティ	C-2-2
高橋宏行	NTT	120 GHz 帯無線リンク用 10 Gbit/s QPSK 変復調モジュール	ソサイエティ	C-2-83
谷口隆哉	鹿児島大	DPAE 技術を用いた 17 Gb/s 光配線用 VCSEL ドライバ	ソサイエティ	C-12-14
長谷宗彦	NTT	InP HBT による 32-GS/s 6-bit ダブルサンプリング型 D/A 変換器	総合	C-10-6
		超高速 DAC のダイナミック特性向上	ソサイエティ	C-10-12

林 優一	東北大	コネクタ接触不良部における電流分布に関する考察	総合	C-5-16
		コネクタの緩みが放射電磁界に与える影響に関する基礎的検討	ソサイエティ	CS-6-3
廣田明道	三菱電機	バランス型右手/左手系複合線路を用いた広帯域フォワードカプラ	総合	C-2-99
		バランス型右手/左手系複合線路を用いた広帯域フォワードカプラの試作評価結果	ソサイエティ	CS-2-13
古田敬幸	NTTドコモ	9バンド対応電力増幅器の変調波信号入力時の特性評価	総合	C-2-28
		バラクタを用いた周波数帯可変アイソレータの歪み特性評価	ソサイエティ	CS-4-14
若林 佑	法政大	傾斜入射時における周期構造解析のためのLOD-FDTD法	総合	C-1-20
		傾斜入射時における周期構造解析のためのLOD-FDTD法(II)	ソサイエティ	C-1-11

情報・システムソサイエティ：7名

候補者	所属	題名	大会別	講演番号
青野良範	東工大	On Coppersmith's Technique and its Limit	総合	DS-1-7
伊藤 健	NTT	局所性を考慮した高ビット深度画像符号化に関する検討	総合	D-11-7
内田祐介	KDDI研	ショット境界のbi-gram表現による同一映像検索手法に関する一検討	総合	D-12-31
黒川茂莉	KDDI研	携帯電話上での行動予測モデルに関する検討	総合	D-9-8
小曳 尚	東芝	かん体・錐体応答による照度に応じたLCDの見えの明るさ推定手法	総合	D-11-35
高野恵利衣	埼玉大	周辺状況を考慮して介護者に追隨するロボット車椅子	総合	D-12-86
若山雅史	名大	顕著度を考慮した歩行者の視認性定量化手法の検討	総合	D-12-39

5. 教育活動に関する事項（定款 第6条ロ、ハ、ヘ）

平成18年度に発足した生涯教育委員会、アクレディテーション委員会、CPD委員会、小中高生科学教室委員会で構成する教育活動協議会を中心に平成22年度も教育活動を展開した。

5.1 先端オープン講座に関する事項

受講者の負担軽減と選択幅を広げ、タイムリーな受講を促進するため、5回コース及び2日間の短期集中コースを主体とするコース編成で、春季講座及び秋季講座を開講した。受講者増加に向けた以下の取組みを継続的に実施した。①CPD（技術者の継続的な教育・能力開発）との連携に向け関連学協会と協賛した周知・宣伝。②大口受講団体の探索と継続的取り込み。③新しい技術動向のタイムリーな反映を目指した継続的なコース内容見直し。④継続的受講を促進するための2回目以降受講料の割引。⑤非会員受講者増大に向けたソフトウェア講座専用ホームページの開設及び継続的な新聞雑誌への講座案内記事掲載などによる広報活動の強化。また、少人数応募コースの開催を中止するとともに支出面での経費節減に努めた。

また、継続的なコース内容の見直し・検討の結果、Cコース及びEコースを再編した新たなCs、Cp、Coコースを開講することとした。Bコース（LSI技術）は新コースについての検討を継続的に行った。

春季講座（5月8日～7月10日）と秋季講座（10月2日～

12月4日）を土曜日に開講した。開講講座と受講状況は次のとおりであった。

〔春季講座〕

コース別	受講者数 (): 内団体受講数
A: 情報通信ネットワーク技術	14名
Aa: NGNとインターネット及びIPネットワーク技術	12名
Cs: 実例で学ぶソフトウェア開発	12名
Cp: 実例で学ぶプロジェクトマネジメント	12名
D: 情報通信プロトコル技術	10名
計	60名

（ただし、Cs、Cpコースは短期集中講座、Aa、Dコースは全5回の講座）

〔秋季講座〕

コース別	受講者数 (): 内団体受講数
A: 情報通信ネットワーク技術	11名
Aa: NGNとインターネット及びIPネットワーク技術	13名
Cp: 実例で学ぶプロジェクトマネジメント	7名
Co: 実例で学ぶオブジェクト指向分析	6名
D: 情報通信プロトコル技術	6名
F: 情報セキュリティ技術	9名
計	52名

（ただし、Co、Cpコースは短期集中講座、Aa、D、Fコースは全5回の講座）

5.2 JABEE 活動

JABEEの学部認定審査はほぼ軌道に乗ってきており、平成22年度は定常的な活動を行った。JABEE本体への委員の派遣をしてJABEEの運営に協力するとともに、学部プログラムの審査を電気学会、情報処理学会と連携して実施した。また、審査員の確保並びに教育機関への最新規程等の周知を目的に、JABEE審査講習会を3月17日に予定していたが、東日本大震災の影響で中止とした。

5.3 技術者の継続的な教育・能力開発

CPD (Continuing Professional Development) 委員会は、本会の技術者教育への取組みをJABEE活動とCPD活動を車の両輪として形成するとの位置付けから設置され、日本工学会下のCPD協議会（平成19年度にPDE協議会から改組）と連携して活動を進めている。22年度も21年度に引き続いて、電気学会、情報処理学会と協力して、「電気電子・情報系CPD協議会」を密接に開催し、共同で協議を進めた。Web版CPDポイント登録システムの試行状況を踏まえ、CPD活動を更に普及させるため、『10年間の変化を捉え、学会として、CPD活動を、戦略的に、どのように方向付けるべきか』をテーマに集中討議を進めた。CPDコンテンツの評価基準、CPDの利用のしやすさ、大学でのCPD適用などを切り口に、具体的な施策を検討し、学会の活動としては長い目で地道に進めていくこととしている。対外的には、日本工学会CPD協議会の活動に参画し、CPDガイドラインの策定、ECE (Engineering Capacity Enhancement) プログラムの第1弾（ナノテク）の企画・実施、CPDポータル・ソフトウェア開発の推進を行った。

5.4 小中高校生を対象とした科学教室

小中高校生を対象とした科学教室は、子供の科学離れを防ぐための活動の一環として平成8年度から実施してきた。平成22年度も会員及び関連企業の協力のもとに、各支部と連携して、活動範囲等を拡大しながら実施した。開催回数は18回、参加者合計は831名であった。

また、本活動を支えている「子供の科学教室基金」を長期的、健全に維持するため、平成14年度から開始した募金活動については、平成22年度（平成23年3月末現在）401件（個人397名、3社、1団体）から約181万円の募金協力を得て有効に利用させて頂いている。

平成22年度の活動状況について以下に示す。

題 目 ・ 講 師	開催年月	参加数
科学教室：北見工業大会会場 テ ー マ：不思議がいっぱい科学の世界 講 師：鈴木正清（北見工大）、尾知 博・黒崎正行（九工大）、伊藤良生・笹岡直人（鳥取大）、尾上孝雄（阪大）	H22.6.12	42名
実習教室：東京大会会場 テ ー マ：「コンピュータ・プログラミングを自作してみよう！」 コーディネータ：池田 誠（東大） 講 師：浅見 徹（東大）、山崎克之（長岡技科大）、野々山 紫（NTT-AT）	H22.7.18 (午前・午後2回)	65名
科学教室：埼玉大会会場 テ ー マ：不思議がいっぱい科学の世界 講 師：木村雄一・斎藤作義・山浦健太・吉田 顕・小川大介（埼玉大）	H22.7.23	29名
科学教室：琉球大会会場 テ ー マ：先端の電子情報通信技術にふれてみよう 講 師：高良富夫・浦崎直光・北嘉広樹・金城光永・名嘉村盛和（琉球大）	H22.7.24	134名
科学教室：大阪大学基礎工学部システム科学科電子システム学コース一日体験入学 テ ー マ：システム工学とは 講 師：潮 俊光（阪大）	H22.7.28	61名
見 学 会：NTT 武蔵野研究開発センタ テ ー マ：「見てみよう！通信技術の最先端」 講 師：池田博昌（東京情報大）、石井六哉（横浜国大）	H22.7.30	105名
科学教室：富山県立大会会場 テ ー マ：携帯電話のセキュリティと防災講座—学ぼう！携帯電話の安全対策 コーディネータ：西田泰伸（富山県立大） 講 師：扇浦紗苗・村谷あきな（NTT ドコモ）、広川尚史・上園博美（KDDI エボルバ）、増田年明（KDDI） ※この企画は富山県立大学で毎年開催している「夏休み科学教室：ダビンチ祭」の企画に本会が参加した。	H22.8.6	13名
科学教室：小・中・高校生の科学教室「夏休み科学教室」（明治大学） テ ー マ：数理パズルを解くコンピュータプログラムを作ろう！ さわると反応するアニメーションを作ろう 講 師：玉木久夫・石畑 清・宮下芳明（明大） ※この企画は明治大学理工学部で毎年開催している「夏休み科学教室」の情報科学科の企画に本会が参加した。	H22.8.19	91名
科学教室：日本女子大会会場 テ ー マ：不思議がいっぱい科学の世界 講 師：今井 元・小川賀代（日本女子大）	H22.8.21	47名
体験教室：高校生のためのロボット体験教室（名古屋テレビ塔会場） テ ー マ：自律移動ロボット制御体験教室 講 師：辰野恭市・小中英嗣（名城大）	H22.8.24	14名
見 学 会：富士通研究所 テ ー マ：見て見よう！映像や音楽、大切な文書を守る情報保護技術の世界 講 師：阿南泰三・倉木健介・岩永裕史（富士通研）	H22.8.26	10名
見 学 会：NHK 放送技術研究所 テ ー マ：見てみよう！最先端技術の世界 講 師：久保田啓一・境田慎一・高橋正樹（NHK）	H22.8.28	38名
科学教室：長岡技術科学大会会場 テ ー マ：親子で学ぼう！ケータイの安全対策 コーディネータ：山崎克之（長岡技科大） 講 師：水谷 響・大久保亜貴果（NTT ドコモ）、広川尚史・鈴木康祐（KDDI エボルバ）、澤田茂典（KDDI）	H22.10.2	15名

科学教室：安心して生活できる社会をめざして（中央大会会場） テ ー マ：ひみつの話 講 師：今井秀樹（中大）	H22.11.3	44名
科学教室：浦添市立産業支援センター会場 テ ー マ：親子で学ぼう！携帯電話の全て—仕組みから安全対策まで— 講 師：和田知久（琉球大）、深水 綾・中村愛由美・岸久美子（NTT ドコモ）、鈴木康祐・山下京子（KDDI エボルバ）	H22.11.13	11名
科学教室：日本女子大会会場 テ ー マ：不思議がいっぱい科学の世界 講 師：高橋雅江・濱部 勝（日本女子大）	H22.12.11	34名
科学教室：倉吉総合産業高校会場 テ ー マ：不思議がいっぱい科学の世界 講 師：岸田 悟・伊藤良生・笹岡直人・立木純夫（鳥取大）、尾上孝雄（阪大）、尾知 博・黒崎正行（九工大）	H22.12.18	28名
科学教室：琉球大会会場 テ ー マ：不思議がいっぱい科学の世界 講 師：翁長健治・高良富夫・和田知久・名嘉村盛和（琉球大）、牧野光則（中大）	H23.3.5	50名

計 18回 831名

6. 関連学術団体との連携に関する事項（定款 第6条口）

平成22年度は、下記のほかに256件の協賛・後援等を行った。

- ・これからの（超高齢社会）の電子政府・電子自治体を考えるシンポジウム：先行する韓国の行政改革・日本がめざす国民本位の電子行政
(平成22年5月19日 中央コリドー情報通信研究所協賛)
- ・第1回モバイルシニアネットシンポジウム「シニアの社会参加を支援する情報通信端末・サービスとは？」
(平成23年3月3日 コミュニティリンク後援)

7. 提言等に関する事項（定款 第6条へ）

「提言等」に関する策定・公表プロセスを経て次のとおり提言等を行った。

- (1) 総合科学技術会議基本政策専門調査会「科学技術基本政策策定の基本方針（案）」に対するパブリックコメント（2010年6月7日）
- (2) 29学会（43万人会員）会長緊急声明（2010年7月30日）
- (3) 第4期科学技術基本計画および第3次男女共同参画基本計画への要望「科学技術分野での男女共同参画の推進に向けての要望」（平成22年8月3日）
- (4) 独立行政法人日本学術振興会「平成25年度公募から適用する（系、分野・細目表）に関する提案及びその根拠となるデータ等について」（2010年8月27日）

8. 学生事業に関する事項（定款 第6条へ）

8.1 会誌「学生会報告」欄の掲載記事

各支部学生会の活動状況等を会誌「学生会報告」欄に掲載した。

- ・平成22年7月号：平成21年度各支部学生会事業報告
- ・平成23年2月号：各支部・学生ブランチ学生会員の感想

8.2 学生員の入会勧誘

各支部に入会勧誘のためにPR用資料として、「ポスター」と宣伝を兼ねた「学生用入会案内」をそれぞれ配布した。

各支部において学生員増強基金を利用した学生員勧誘、学生ランチ設置校募集が行われた。

また、学生員増強基金規程の改正に伴い、使途の事業が限定された。

8.3 学生へ情報小冊子の配布

学生への情報小冊子「学生の皆さんへ」を1万部作成し、年2回学生員及び各支部へ配布した。特に卒業（修了）予定の学生に対して会員資格手続きの早期連絡、正員に昇格する際の会費減額、会費未納者への支払勧奨を1月から毎月行い、会員継続を要請した。

8.4 学生ランチについて

平成22年度は、設置校申請23校（北大、東北大、神奈川工科大、慶大、千葉工大、千葉大、津田塾大、電通大、東工大、都立産業技術高専、日本女子大、信州大、新潟大、豊橋技科大、名大、名城大、愛媛大、香川大、徳島大、大分大、福岡工大、宮崎大、琉球大）で活動を行った。

また、ホームページ「学生のひろば」に学生ランチ設置校の活動紹介記事及び設置申込みから報告書作成までの資料、流れを掲載し、学生ランチ設置校の拡大を図った。

支部活動として実施するため、設置校の申請を各支部を通じて受け付けることとした。また、各支部学生ランチ設置校の活動については、学生会連絡会に報告し、各支部学生が自主的に参加し、運営していきける環境作りを検討する。

8.5 学生向けの在校生、地域別会員との交流の場について

東京支部学生会が、中心となり、2011年総合大会で、各支部学生員代表と意見交換、検討を行うこととし、各支部学生員代表者会議（仮称）を開催予定（東日本大震災により中止）。

9. 男女共同参画に関する事項(定款 第6条ロ、ハ、へ)

電子情報通信工学分野において男女が共に、研究・開発・教育等の仕事や勉強、及び学会活動に、十分な力を発揮して快適に参画するための活動を推進した。

平成22年度の活動は以下のとおりである。8月12日～14日、国立女性教育会館（埼玉県）で開催された女子中高生夏の学校～科学・技術者のたまごたちへ～に企画委員を出し、ポスター展示を実施。全国から123名の女子中高生、51名の保護者・教職員が参加して盛大に行われた。日本学術会議会員・連携会員に女性候補者を推薦した。平成23年3月の総合大会において、一般公開セッション「電子情報通信分野におけるワークライフバランスの現状と課題」を企画した。

10. 検討部会に関する事項（定款 第6条へ）

10.1 他学会との連携

平成16年に「電気・情報関連学会連絡協議会」を発足させ、共通の問題に対して協力して取組みを進めてきた。他学会への各種行事に会員扱いで参加を認め合い、共通のホームページを立ち上げて各学会のホームページとリンクを張るなど進めてきた。平成22年度は、新法人法に対する取組みを共通課題と位置付け、重要な情報交換を行うとともに、複数の学会で共催している支部連合大会収支の計上方法等、各支

部の経理面での改善策を協議、5学会で方針を統一し、各支部で改善実施した。

11. 会員に関する事項（定款 第3章）

11.1 名誉員の推薦

青山 友紀（慶大）
伊藤 弘昌（JST）
伊藤 泰彦（KDDI 研）
内田 直也（産総研）
鈴木 滋彦（NTT-AT）
中村 慶久（岩手県立大）
韓 太舜（NICT）
古井 貞熙（東工大）

を定款第7条イ項により名誉員に推薦した。

11.2 フェロー称号の贈呈

[基礎・境界ソサイエティ：4名]

贈呈者氏名	貢 献 内 容
佐野 雅己	不規則現象の観測と特徴付けの基礎研究
荒川 薫	非線形・知的信号処理に関する研究と応用
中村 英夫	世界最高水準で安全な高性能列車制御システムの開発
藤井 哲郎	超高精細デジタル画像の研究開発と応用

[通信ソサイエティ：13名]

贈呈者氏名	貢 献 内 容
Abbas Jamalipour (アバス ジャマリプール)	For contributions to Design and Development of Mobile Wireless Communication Network
石橋 豊	マルチメディア QoS 制御の研究とその学会活動の活性化
加島 宜雄	光ファイバ接続技術及び光アクセス網伝送技術の実用化
菊間 信良	適応アレーアンテナ信号処理技術の研究開発および学会活動
下條 真司	インターネットの応用に関する学際的展開とその研究
正源 和義	衛星放送の研究と放送衛星搭載成形ビームアンテナ実用化
多氣 昌生	電磁界の生体への安全性に関する研究活動
千葉 勇	適応制御フェーズドアレーアンテナの開発と実用化
秦 正治	デジタル移動通信方式の研究開発と国際標準化
宮本 裕	大容量光ネットワークにおける光位相制御変復調技術の先駆的研究
本島 邦明	光加入者システム及び波長多重伝送システムの研究開発
山崎 克之	広帯域交換方式に関する先駆的研究、標準化、映像伝送等への応用
若菜 弘充	新たな移動体衛星通信システムに関する先駆的な研究開発

[エレクトロニクスソサイエティ：5名]

贈呈者氏名	貢 献 内 容
雨宮 好仁	量子集積デバイスに適した回路アーキテクチャの開拓
石川 容平	誘電体共振器フィルタの高性能化ならびに実用化に関する研究
岩本 光正	誘電体物性工学に基づく有機電子材料評価手法に関する研究
松澤 昭	A/D 変換器およびアナ・デジ混載集積回路の先駆的研究と実用化
向井 孝彰	半導体光増幅器の先駆的研究

[情報・システムサイエティ：12名]

贈呈者氏名	貢 献 内 容
赤塚 孝雄	生体情報の定量的可視化方法の開発とその医学応用
浅野 哲夫	離散アルゴリズムと計算幾何学の発展
石川 博	実用的なデータベース技術に関する先駆的研究とその成果の普及
岡本 敏雄	教育情報システムの知識工学的かつ教育工学的研究
國井 秀子	情報処理産業界における人材育成とデータベース技術開発
古宮 誠一	知能ソフトウェア工学の振興および学会活動
嵯峨山茂樹	音声・音楽・音響信号処理手法の研究開発
曾根原 登	デジタルコンテンツ流通技術の研究と実用化
土井美和子	文書処理におけるヒューマンインタフェース技術の開発と実用化
仁木 和久	人間の学習と記憶の脳認知科学的アプローチによる先駆的研究
松本 正雄	ソフトウェア高品質化と経営 ICT 研究活動創出
山口 英	インターネット構築技術の研究と情報セキュリティ技術の展開

11.3 シニア会員称号の贈呈

(基礎・境界サイエティ：25名)

板倉 哲朗	久保 博嗣	三須幸一郎	横田 光広
井上 高宏	黒澤 実	毛利 公美	鷲野 翔一
井幡 光詞	才所 敏明	森井 昌克	和高 修三
岩橋 政宏	白石 善明	山路 隆文	渡部 泰明
尾上 孝雄	張 熙	山下 茂	
鎌田 一雄	西川 清史	山田 茂	
木村 友則	兵庫 明	山田 功	

(通信サイエティ：80名)

秋山 豊和	九鬼 孝夫	茶木愼一郎	松岡 秀浩
東 裕司	倉嶋 利雄	富田 茂	松尾 真人
飯田 勝吉	桑原 伸夫	豊田 啓孝	丸山 充
石川 義裕	小池 新	中野 愼夫	水野 修
石田 修	古津 年章	中村 寛	峰野 博史
石橋 圭介	小根森章雄	西森健太郎	三宅 延久
石山 俊彦	佐方 連	蛭川 忠三	宮崎 千春
岩切 直彦	佐藤 伸二	長谷川 浩	三好 匠
上原 一浩	佐野 裕康	葉玉 寿弥	村野 公俊
内田 雄	塩川 茂樹	林 正博	柳生 智彦
内田 直樹	地引 昌弘	林 亮司	山口 良
梅田 成視	新熊 亮一	半杭 英二	山村 哲哉
梅原 大祐	諏訪 啓	桧垣 誠	山室 雅司
江崎 修司	高瀬 浩史	福迫 武	山本 和彦
大館 紀章	高橋 賢	堀内 浩規	吉田 誠
大槻 知明	高橋 応明	前田 香織	吉田 健一
岡 尚人	高原 厚	前山 利幸	吉本 直人
岡田 一泰	滝 和也	牧野 将哉	若山 俊夫
加藤 寧	田口 光雄	増田 悦夫	和田 忠浩
北辻 佳憲	田嶋 裕久	松岡 伸治	渡辺 健次

(エレクトロニクスサイエティ：30名)

相原 公久	大貫進一郎	田島 賢一	前澤 宏一
青柳 昌宏	大平 孝	田中 愼一	三橋 慶喜
有本 和民	小野 直子	田中 雅宏	武藤伸一郎
石井 清	嘉数 誠	土田 英実	山中 宏治
伊藤 弘	川崎 満	津留 正臣	横内 則之
内山 博幸	工藤 耕治	中川 匡夫	渡辺 理
大谷 昭仁	佐藤 健二	半谷 政毅	
大塚 浩志	下沢 充弘	堀口 健一	

(情報・システムサイエティ：36名)

相京 隆	岩村 雅一	尾崎 敦夫	北原 義典
井上 智生	大川 茂樹	片岡 章俊	絹川 博之
今井 亨	大町真一郎	北原 格	久野 義徳

小尻 智子	武田 一哉	島山 一実	宮崎 修一
小林 透	寺田 松昭	松居 辰則	宮寺 庸造
五味 裕章	中村 勝一	松居 真一	村上 伸一
佐々木 整	西村 雅史	松原 行宏	山田 武志
高木 直史	西脇 大輔	眞鍋 佳嗣	米田 友洋
滝嶋 康弘	任 福継	間野 一則	力武 健次

以上 171 名

11.4 会員の現況

平成 19 年度から実施している、①年会費の前納制、②銀行(ゆうちょ銀行含む)での自動引落しを利用した場合の年会費の 5% 割引、を継続的に実施した。これらの施策により平成 22 年度末の会員数は前年度比マイナスとなつてはいるが、前納制移行前の減少と比較すると会費未払い者が 4,000 件を超えることはなく、減少率は鈍化している。今後も更に継続的に調査を実施する。

会員数の減少に対する継続的な取組みとして、①各学生員に対して学生員から正員への移行時の 2 年間年会費減額サービスの周知と「正員証」の送付、②支払いを忘れて滞納している会員に対して継続的な会費請求を実施、③学生員の意識向上を意識して学生ランチ校の増大施策、などを実施した。④外国籍を有し、かつ海外に在住する正員/学生員/准員の年会費について、シスターサイエティ協定等に基づく割引を適用することとした。

(1) 会員数は次のとおりである。

上段：年度末会員数 [] 内はフェロー会員数

下段：() 内は当年度会費未納者を除いた年度末会員数

会員種別	名誉員	正 員	学生員	准員	特殊員	維持員	合 計
平成 21 年度末会員数	86[34]	28,906[674] (26,874)	5,850 (5,457)	2	323	178	35,345[708] (32,920)
平成 22 年度末会員数	88[37]	28,481[704] (26,390)	5,953 (5,546)	2 (1)	313	173	35,010[741] (32,511)
前年度末との差	2[3]	- 425[30] (- 484)	103 (89)	0 (-1)	-10	-5	- 335[33] (- 409)

(注) 名誉員の城水元次郎は平成 22 年 4 月 18 日に、榎本 肇は 5 月 13 日に逝去した。

(2) 各支部における年度末予定会員数は次のとおりである。

上段：年度末会員数 [] 内はフェロー会員数

下段：() 内は当年度会費未納者を除いた年度末会員数

支部	名誉員	正 員	学生員	准員	特殊員	維持員	合 計
北海道	1[1]	495[14] (443)	220 (210)	0	5	4	725[15] (663)
東 北	7	883[43] (837)	234 (221)	0	16	2	1,142[43] (1,083)
東 京	59[23]	16,027[442] (15,218)	2,025 (1,917)	1 (1)	177	110	18,399[465] (17,482)
信 越	1[1]	461[7] (431)	141 (131)	0	7	6	616[8] (576)
東 海	5[4]	1,701[39] (1,601)	459 (445)	0	31	13	2,209[43] (2,095)
北 陸	0	478[8] (444)	140 (129)	0	5	1	624[8] (579)
関 西	11[6]	3,484[97] (3,256)	708 (658)	1 (0)	41	28	4,273[103] (3,994)
中 国	1[1]	868[13] (792)	339 (318)	0	11	3	1,222[14] (1,125)
四 国	1[1]	422[7] (378)	171 (157)	0	6	1	601[8] (543)

九州	0	1,297[27] (1,174)	506 (469)	0	14	5	1,822[27] (1,662)
海外在住	2	141[3] (133)	4 (3)	0	0	0	147[3] (138)
Overseas	0	2,224[4] (1,683)	1,006 (888)	0	0	0	3,230[4] (2,571)
合計	88[37]	28,481[704] (26,390)	5,953 (5,546)	2 (1)	313	173	35,010[741] (32,511)

II. ソサイエティ事業

平成 22 年度も、各ソサイエティごとに特色のある企画等を実施し、会員の研究成果の発表と議論の場を提供する事業を中心に活動した。また、ソサイエティ連絡会を 4 回開催し、各ソサイエティ等の連携を図った。

◎ 基礎・境界ソサイエティ

基礎・境界ソサイエティは本会関連の研究分野のうちでも基礎領域や境界領域での研究活動を支援し、新領域の創造を支援する役割を担っており、この特性上、他ソサイエティに比して広範な研究分野、研究コミュニティの集合となっている。平成 22 年度基礎・境界ソサイエティでは、ソサイエティ副会長（事業担当）を委員長とする事業委員会が立ち上がり、将来構想の検討を開始した。特に、各研究コミュニティが将来独立したソサイエティになり、基礎・境界ソサイエティ連合になるという構想を掲げ、その第一歩として各研究コミュニティの独立した自由な活動を促進・支援するための関連規則が整備された。

(1) サブソサイエティ運営規程の制定：

本ソサイエティ独自の形態であるサブソサイエティ制度に対して、その意義やあり方が検討され、新たにサブソサイエティ運営規程が制定された。サブソサイエティ主催の国際会議等が開催可能になる等、サブソサイエティ独自の研究活動の活性化につながる事が期待される。

(2) 国際会議・国内会議事務処理要項の制定：

本ソサイエティでは、国際会議だけでなく国内の参加者のみからなる国内会議も国際会議の事務手続きにのっとり開催できることとした。これにより従来よりも自由な形式で国内会議を開催することが可能になり、研究活動の活発化につながる事が期待される。

(3) 新電子論文誌 Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE (略称 NOLTA) の発行：

非線形理論とその応用サブソサイエティが中心となり準備されてきた新電子英文論文誌 NOLTA が 2010 年 10 月 1 日に発行された。Regular Section と Special Section on Recent Progress in Nonlinear Theory and Its Applications 双方合わせ、招待論文が 3 件、一般論文が 14 件掲載されている。オンラインジャーナルのみの利点を生かし、掲載費用はページ数によらず一定である。また、当面の間論文閲覧が無償で可能となっている。

(4) 論文誌編集体制の検討：

非線形理論とその応用サブソサイエティが中心となり、オンラインジャーナル NOLTA を創刊したように、将来的に各コミュニティが独立して論文誌を発行していくことで自由な研究活動が促進されると思われる。これに向け、まず従来、和英に分かれていた編集委員会を研究分野ごとに統合す

るためのワーキンググループを発足させた。各研究分野ごとに編集委員会を統合することにより、編集活動の効率化に伴う編集作業の低減、和英における査読基準の差異の解消等が期待される。平成 23 年度より一部の研究分野でトライアルが行われる予定である。

(5) 活性化事業について：

基礎・境界ソサイエティ活性化事業内規について、改正の検討が開始された。サブソサイエティや研究専門委員会の独自の研究活動を促す事業を推進することを目的として策定された基金であるが、従来は対象範囲が新規事業などに限定されていた。この活性化事業の対象範囲をより広げることを検討している。サブソサイエティや研究専門委員会独自の活動を促すことにより、研究活動の更なる活性化が期待される。

(6) サブソサイエティ、研究専門委員会、時限研究専門委員会の設立：

情報理論とその応用サブソサイエティ、イメージ・メディア・クオリティ研究専門委員会、及び高信頼制御通信時限研究専門委員会の設立が運営委員会にて提案され、承認された。

(7) ソサイエティ表彰者の決定：

7 月 26 日（月）に早大においてソサイエティ表彰審議委員会を開催し、特別功労賞 1 件、功労賞 3 件、功労感謝状 8 件の表彰者を決定した。特別功労賞は早稲田大学の 大附辰夫 先生への贈呈と決定した。ソサイエティ大会期間中の 9 月 15 日（水）に表彰式が行われた。

(8) ソサイエティ誌 Fundamentals Review の充実：

平成 19 年度から毎年 4 号を発刊してきた Fundamentals Review (FR) 誌であるが、平成 22 年度も同様のペースで発刊した。FR 誌は主に、特別寄稿（基礎・境界ソサイエティで活躍された諸先輩の科学技術者歴を通じた啓発的な内容の論説）、技術の原点（技術革新や技術の原点をその着眼点や現在までの影響について解説頂いた論文）、レビュー論文／解説論文からなる。これらの中から今年度新たに優秀な論説を表彰する FR 誌ベストオーサー賞が制定された。

◎通信ソサイエティ

通信ソサイエティでは、新会計ルールに対応した健全な運営を行うとともに、執行委員会、会員事業企画・運営会議、ソサイエティ編集会議、研運運営会議、各特別委員、それぞれにおいてソサイエティの活性化、会員サービス向上のための施策を進めてきた。

特に、学会の長期的活性化については、未着手分野の開拓、第三者の意見を踏まえたベンチマーク策定など、通信ソサイエティ会長勅命の長期ロードマップ策定への体制を構築し、次年度へ継続する形で取り組むこととした。当該成果は、日本学術会議から本会へ依頼があった学会長期ロードマップ作成へも還元することとし、次年度の大会等にて公にする。

(1) 財務管理

ソサイエティの独立採算運営のもと、通信ソサイエティの財務基盤は収入が微減ながらも、様々な費用効率化により堅調な基盤を維持している。財務施策としては、CS アーカイブス講演資料投稿ページ運営の外部委託による大会活動強化や、通信ソサイエティ運営資金活動資金規定の見直しによる会員活動支援の改善着手など、活動活性化施策の推進を行った。また、英文論文誌 B レター改革による英文レターオンライン化などの今後の活動活性化に向けて来年度予算案に費

用を計上した。

予算編成及び収支決算については、一般社団法人法の適用に向けて決算主義に基づいた新会計ルールの更なる運用具体化を進め、国際会議関係者及び研専活動関係者に対して改めて周知徹底を行った。平成20年度から主催・共催の国際会議の収支がソサイエティ会計に組み込まれ、国際会議が主要な事業の一つに位置付けられるようになったが、ようやく通信ソサイエティの年度収支が安定するようになり、新会計ルールの定着期を迎えた。

(2) 研究専門委員会

研究会活動の活性化及び学会会員増強をポイントとした活動を行った。各研専へのアンケートを実施し、課題の共有化や施策の具体案について議論を行った。学会ロードマップ作成への検討依頼及び通信ソサイエティ会長からの依頼事項である将来の技術領域の調査と取り組みに対する検討に合わせ、通信ソサイエティとして課題解決に取り組んでいく。これに関連し、研究会活動の活性化及び技術研究報告の予約販売部数の減少を食い止めるための施策の一つとして、研究会活動を会員に広く認知して頂くために、ソサイエティ大会等におけるパンフレット配布を含む広報活動を継続して行った。更に、すそ野会員へのサービス向上、会員増のための施策として、CEATEC 連携企画への参加・協力を行った。学会活動のアピールなどの点で大きな成果があったと考えられる。一方、大会の活性化に向けた施策として、これまでの企画セッションに加えて、ポスターセッション及び研究会表彰式の実施を大会委員会に提案し、実施形態について運営上の課題を洗い出しながら定め、平成23年度秋のソサイエティ大会より実施できるような体制とガイドラインを整えた。このほかに、エレクトロニクスソサイエティの研究技術会議との意見交換会を実施し、ソサイエティ連携で対応していくべき課題・施策などについて議論を行い、今後も議論を継続していくこととした。

(3) 技報電子化実運用開始

平成20年10月より平成22年9月までの2年間において技報電子化トライアルを実施した。その間に実施したトライアル利用者に対するアンケートの結果を分析した上で、平成21年12月の執行委員会で平成22年10月からの実運用の決定がなされ、この決定に従い、平成22年10月からの実運用を開始した。平成22年5月に実施し2回目のアンケート結果を踏まえ、また収支的に問題ないことを確認した上で、現在の技報収支構造を崩さない、紙ベースの技報を主としてその技報予約者を主体とした実運用を行った。今後は、定期的にアンケートをとりながら、電子化技報が主となる次フェーズの実用化への移行時期や方法を検討していく。また、価格帯やDVDの発行など、研究会活動の活性化に役立つ施策についても検討していく。この後者の取組みとして、必要に応じて、技報の内容を限定的にダウンロードできる個人クーポンの発行ができる仕組みを作った。

(4) 運営規程改定作業

従来、通信ソサイエティでは、会員増強関連、国際関連、広報関連の企画・運営ほかの業務を、通信ソサイエティ・会員サービス幹事が担当してきたが、当該業務における対外交渉・調整等をよりスムーズに行えるようにするため、当該幹事名称を、担当業務内容を顕著に表した新名称「会員事業企画幹事」に変更することとし、関連する運営規程上の記載の修正のため、5月に改定を行った。

また、ソサイエティの国際活動、広報活動並びに会員サー

ビス事業を充実、発展させるため、関連する会議（通信ソサイエティ国際委員会、通信ソサイエティ・ホームページ管理連絡会）を統合して一つの「会員事業企画・運営会議」とし、当該会議に関するソサイエティ規程を整備した。これに伴い、運営規程上の関係する記載の追加及び変更のため、12月に運営規程の改定を行った。

(5) 通信ソサイエティ総会

ソサイエティ大会時(9/15)に総会を開催した。ソサイエティ功労顕彰状(18名)、活動功労賞(93名)、論文賞関連(詳細は通信ソサイエティ論文賞欄に記載)の贈呈式を行った。恒例の会長企画特別講演として、関西大学 白石真澄教授による「多様な働き方とワークライフバランス」、JAXA 川口淳一郎教授による「はやぶさ 地球帰還へのみちのり」を開催し、会場満席の盛況であった。

(6) 通信ソサイエティ Welcome Party

ソサイエティ会員、特に学生・若手研究者が気楽に集まり歓談できる場を提供することを目的として、ソサイエティ大会初日(9月14日)に第3回通信ソサイエティ Welcome Party を開催した。パーティでは、学生会員へ向けて、企業・研究機関に所属する研究者に、社会人研究者としての経験を語って頂いた。また、通信ソサイエティで活発に研究発表している企業・研究機関や、通信ソサイエティに所属する研究専門委員会の活動を紹介するコーナーを設けた。更に今回は学生の参加者増を狙った新企画として通信ソサイエティの活動紹介パンフ、マガジンアーカイブDVD等を同梱した“Welcome Pack”を作成し、学生の参加者に無料で配布するという試みも行った。参加者は学生が84名(昨年59人)、社会人167名(昨年146人)、合計251名(昨年205人)であり、本部主催の懇親会に並び立つほどの規模に発展し盛況のうちに終了した。

(7) 英文ニュースレター (IEICE-CS GLOBAL NEWS-LETTER)

通信ソサイエティの英文ニュースレターは2002年に創設され、3月、6月、9月、12月の年4回、通信ソサイエティ会員に発行している。通信ソサイエティの海外会員及び外国人会員と他の会員との間での情報共有、通信ソサイエティの国際化を目的としている。2011年3月発行号から表題及び番号付けの変更、発行月の英文表記追加などの形式を変更するとともに、寄稿並びに投稿の記事数を15件に増やすなど中身の充実を図った。

(8) CS アーカイブサービスの実施

9月のソサイエティ大会について、講演論文集に加え通信ソサイエティの企画講演(チュートリアル、パネル、依頼講演)資料の一部を閲覧できるサービスを実施した。通ソEメールニュースによる周知の効果もあり、公開月のアクセス数は300件を超えた(IPアドレス数に基づく計測)。3月の総合大会については地震に伴う大会中止を受けて企画講演資料の閲覧サービスは中止し、講演論文集のみとした。

(9) 大会企画

大会参加者の満足度の向上と参加者の増加を狙いとして、2010年ソサイエティ大会(大阪府立大学)において、「激甚災害に対するネットワーク技術—大地震が来たら」と題して特別企画を行った。災害地区における携帯電話網の話題など、一流の講演者5名による内容のある講演とパネル討論が展開できた。参加者は31名であった。震災により開催が中止となった2011年総合大会(東京都市大学)では、「鉄道におけるICT」と題してチュートリアルセッションを企画し

た。ICT 利活用の先進事例が紹介されるセッションとして、最前線で活躍中の4名より寄稿された。

(10) 通信ソサイエティ論文賞

通信ソサイエティ論文賞として2009年4月から2009年9月発行の和英論文誌及び和文マガジンに掲載された論文の中から、優秀論文賞1編、チュートリアル論文賞1編、Best Paper Award 3編、Best Letter Award 0編（該当なし）、Best Tutorial Award 0編（該当なし）、和文マガジン論文賞0編（該当なし）を選定し、ソサイエティ大会総会で総評披露とともに表彰式を行った。続いて、本部の論文賞と選定期間を合わせて、2009年10月から2010年9月発行の和英論文誌及び和文マガジンに掲載された論文の中から、優秀論文賞3編、チュートリアル論文賞1編、Best Paper Award 4編、Best Letter Award 2編、Best Tutorial Award 0編（該当なし）、和文マガジン論文賞1編を選定した。これは新しい選定手順に基づくもので、2011年5月の執行委員会で表彰式を行うことになっている。

(11) 英文オンラインレター誌創刊について

英文論文誌Bからレターを分離し、通信ソサイエティの全研究分野をカバーするオンラインレター誌（IEICE Communications Express）を次年度から創刊することとし、予算化した。運営においてはエレクトロニクスソサイエティのELEXと協力を図り、電子情報通信学会のオンラインレター誌としての統一感があるものを目指す。

(12) 招待論文、論文賞受賞論文オープン化について

英文論文誌のインパクトファクター向上及び論文の質の向上の施策として、引用が期待できる論文を積極的に情報発信するために過去5年の招待論文や論文賞受賞論文をWebで公開した。和文論文誌、和文マガジンも歩調を合わせ、同様に論文賞受賞論文の無料公開を始めた。

(13) 通信ソサイエティマガジンのアウトリーチについて

会員向けに新技術・トレンドを紹介・啓発してきた通信ソサイエティマガジンのアウトリーチの方策として、一般の人々を対象に年間購読とpdf購読の2形態で販売することが提案され、2011年4月以降から実施されることとなった。

(14) 国際会議

通信ソサイエティ主催で1件、通信ソサイエティ共同主催で2件の国際会議を開催した。また、通信ソサイエティとして3件、通信ソサイエティの研究会として1件の国際会議を協催するとともに、通信ソサイエティとして5件、通信ソサイエティの研究会として2件の国際会議に対し協賛を行った。東日本大震災に関連した福島第一原発事故により、日本開催の国際会議の中止が相次いでおり、ICCなど主催を目指す国際学会開催に向けて最大限の協力・支援を行いたい。

◎ エレクトロニクスソサイエティ

2010（平成22）年度は、エレクトロニクスに関する材料、部品、デバイス、サブシステムの研究領域において、産官学連携促進、科学技術の進歩への貢献や、会員（研究者）の満足度向上を目的とし、全体を統括する運営／執行委員会のもと、「企画会議」、「編集出版会議」、「研究技術会議」の3会議体制で、本会全体及びソサイエティの活性化につながる新施策の検討及び具体化を進めている。現在の課題は会員の増強（特に企業会員）と運営の一層の効率化である。会員増強対策としては、ソサイエティホームページの大幅な改善、エレクトロニクスソサイエティ（エレソ）Newsletterの刷新、

大会におけるソサイエティプレナリーセッション特別講演や研究会特別講演等のビデオのWeb配信の拡充、技報の電子アーカイブ化拡充など会員サービス向上の施策を推進中である。また、研究成果発表の重要な場となる論文誌について、英文誌Letterの機能をELEXへ集約するといった、大きな改革を進めている。更に、幾つかの時限研究専門委員会を常設研究専門委員会に移行するとともに、新たな時限研究専門委員会を設置し、ソサイエティ会員の関わる分野の研究活動の活性化を支えている。運営の効率化としては、執行委員会資料DB化、リーダーズミーティング（専研幹事向けオリエンテーション）などを継続して進めている。以下、今年度のソサイエティの主な活動を三つの会議ごとに記す。

1. 企画会議

(1) 予算：公益法人法改正に合わせた会計基準のため、平成20年度末決算より国際会議及び研究専門委員会の収入・支出、収支差を本会の基本会計に組み入れ運用中である。平成22年度国際会議の活動及び収支、並びに研究専門委員会の平成23年度予算の集計を、研究専門委員会・研究技術会議協力のもと実施した。また、エレソの更なる活性化に向け、エレソ独自の施策を実施する目的で使用できる「その他事業費」枠の充実を図った。特に、公開コンテンツの拡充、技報の電子アーカイブ化など会員サービスに向けた企画とそれらの効果を解析するための方策に重点的に予算配分した。学会運営に関わる会議、委員会に対する旅費規程については見直しを進め、適正な運用を継続中である。

(2) 顕彰：学生会員活性化を目的としたエレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞を継続して大会ごとに実施し、今年度計12名の表彰を行った。更に、前年度創設したエレクトロニクスソサイエティ会長特別表彰制度は、エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞創設に多大な功績のあった1名の表彰を行った。

(3) 広報：エレソ会員向けビデオコンテンツの拡充。大会エレソプレナリーセッション、及びエレソ材料・デバイスサマーミーティング特別講演の配信に加え、今年度は東京支部との連携により、東京支部記念講演の収録や関西支部ビデオアーカイブへのリンク、PDF版講演資料添付、会員への周知活動など新規施策も開始した。更に、執行委員会や研究専門委員会へのアンケート結果に基づき、エレソNewsletter誌面の刷新を行った。エレソHPについては全般的な見直しを進め、環境の改善を図ると共に、グローバル化に向けた英語版拡充も行った。

2. 編集出版会議

編集出版会議では、会員である読者、投稿者にとっての論文誌とはどうあるべきかを考えつつ、投稿論文数の増加、投稿論文の効率的な査読による出版化等の課題を検討し、以下のような点を実施してきた。

(1) エレソ活性化予算として、掲載料の各種減額・免除、IEICE Electronics Express (ELEX) 宣伝パンフレットの作成などを提案し、実行に移している。

(2) 他ソサイエティとの連携に関しては、ELEXについて他ソサイエティの査読協力のもとにエレソ分野の境界領域も含め投稿数が拡大してきたが、今年度は他ソサイエティの方針を再度確認し投稿分野の見直

しを行った。結果とし A, D ソサイエティに関しては ELEX 分野外として、今後それぞれのソサイエティへの投稿を促し、B ソサイエティは B 独自の電子版レター発刊まで ELEX と引き続き分野を連携することとした。

- (3) 和文誌は、発行部数は漸減の状況ではあるが、著名研究者による招待論文、解説記事は評判が良い。今後電子版を早期公開しながら紙版に関しては集約した発行をするなど、運用を効率化する検討を進めると同時に招待論文、解説論文の割合を増やしてゆく。
- (4) 英文誌は、Letter の ELEX への集約施策として Letter 投稿時の ELEX への投稿促進と、新たに設定した Brief Paper の投稿促進を行った結果、英文誌 Letter の減少と Brief Paper の増加が確認されたため、英文誌における Letter の廃止を決定し次年度 5 月施行の周知を行った。
- (5) ELEX については、英文誌 Letter からの移行も受け入れ、更に他ソサイエティの協力により、エレンソ以外の分野の投稿にも対応してきたが、件数の増加により査読業務に支障が出てきたため、各ソサイエティとの調整を行い投稿分野の見直しを行った。その結果、基礎・境界(A)は分野から切り離し、通信(B)は従来どおり含める対応をすることとした。

3. 研究技術会議

- (1) 研究専門委員会：エレクトロニクスソサイエティの根幹をなす 13 の研究専門委員会と 9 の時限研究専門委員会が年度当初より活発な研究活動を行った。これに加えて、2010 年 10 月に超長期メモリ時限研究専門委員会が新たに設立され、妥当なコストでデジタル情報を超長期に保管可能とする記憶媒体とシステムに関する研究会活動を開始した。更に、時限研究専門委員会のうち、マイクロ波シミュレータ時限研究専門委員会及びマイクロ波・ミリ波フォトニクス時限研究専門委員会がそれぞれエレクトロニクスシミュレーション研究専門委員会、マイクロ波・ミリ波フォトニクス研究専門委員会として、2011 年より常設の研究専門委員会としての活動を行うことを承認した。
- (2) 国際会議：主催・共催 6 件及び協催（技術共催）・協賛・後援案件 6 件を開催した（2010 年 6 月～2011 年 5 月）。
- (3) 2011（平成 22）年ソサイエティ大会（大阪市立大学）では一般講演 352 件に加えて、シンポジウム講演 73 件、ソサイエティ特別企画 1 セッション、チュートリアル 1 セッション、依頼シンポジウム 4 セッション（うち 1 セッションは通信ソサイエティの研専との共催）を実施した。電子情報通信システムを構成するエレクトロニクスの材料、部品、デバイス、サブシステムに関する基礎から応用までの幅広い領域で、情報通信社会の高度化を支えるデバイス技術に関する企画や発表が数多く行われた。ソサイエティ特別企画における特別講演では、「光ファイバの研究開発：約 40 年の歴史を振り返って」と題して、光ファイバ研究開発の初期から光伝送技術、光デバイスへの展開について、この分野を長年けん引してきた 3 名の講師の方から御苦労話などを

含めて講演を頂いた。チュートリアルセッション「エマージングメモリと 3 次元集積メモリ」など興味深い企画も充実し、多くの聴衆を集めた。

- (4) 研究会活性化費を活用し、マイクロ波学生研究発表会、マイクロ波特別講演会（マイクロ波研究専門委員会）、学生・若手を対象とした第一種研究会の開催と優秀なポスター講演に対する表彰（集積回路研究専門委員会）、異種要素の集積化技術研究会における講師招待（次世代ナノ技術時限研究専門委員会）等の企画を各研究専門委員会が立案、実施した。これらにより、学生・若手研究者に対する研究の促進や学会活動の活性化を図った。
- (5) リーダーズミーティング（研専幹事意見交換会）を平成 22 年 7 月 14 日に行った。研究専門委員会運営に関わる幹事、幹事補佐（常設研専幹事 6 名、時限研専幹事 4 名）及び運営委員（10 名）に参加してもらい、各会議から研究専門委員会に関する主要な伝達事項の説明及び質疑を行い、研専運営に関する手続き、情報等に関する理解を深めた。
- (6) 技報アーカイブについては、エレンソ会員が技報 PDF ファイルを閲覧・ダウンロードできるサービスについて利用状況の調査を行い、引き続き試行を継続するとともに、予定どおりコンテンツの蓄積を開始した。歴史的価値のある古い技報について、実際の論文数及びそれにかかる費用見積もりを改めて行い、アーカイブ化の今後の見通しについて検討した。

2011（平成 23）年度は、前年度の活動の振り返りによりその効果をチェックし、課題に取り組むことで、会員の満足度向上、ひいては我が国にエレクトロニクス分野の研究開発促進を目指し、一步一步着実に改革を進める予定である。

◎ 情報・システムソサイエティ

情報・システムソサイエティでは、専門家集団である会員を対象とした研究発表・討論・交流・学習の場の提供と、若年層を含む一般の人を対象とした広い意味でのアウトリーチ活動の充実を図るために、平成 22 年度は、研究会活動の充実、論文誌とソサイエティ誌の充実、若手研究者や学生・一般市民への広報活動の拡充、イノベーション創出を支援する場の拡充、国際化の推進、の五つを柱とする事業を展開した。主要な活動を以下に示す。

(1) FIT2010（情報科学技術フォーラム）の開催

ソサイエティ大会（ISS/HCG）と情報処理学会（IPSI）の秋の全国大会を統合した FIT2010 を、平成 22 年 9 月 7 日～9 日の 3 日間、九州大学伊都キャンパスで開催した。発表件数は、査読付き論文が 88 件、一般論文が 668 件の計 756 件であり、参加者数は 1,500 名であった。発表件数・参加者数ともに前年比約 6% 減となった。例年どおり、船井業績賞、船井ベストペーパー賞、FIT 論文賞、FIT ヤングリサーチャー賞を選定・表彰した。FIT2011 は、函館大学で、平成 23 年 9 月 7 日～9 日に開催予定。

(2) 2011 年総合大会

東京都市大学世田谷キャンパスで平成 23 年 3 月 14 日～17 日に開催される予定であったが、3 月 11 日に発生した東日本大震災の影響により中止となった。これに伴い、ソサイエティ特別企画として予定していた学生ポスターセッション

230 件も中止となった。また、平成 22 年度における情報・システムソサイエティの学術奨励賞受賞者は 7 名であった。

(3) 選奨に関する活動

情報・システムソサイエティでは、ソサイエティの独自性向上と活性化のための施策として、サーベイ論文、先見論文、連作論文を選定対象とするソサイエティ論文賞を設定している。また、ソサイエティ活動について顕著な貢献があった会員を選奨する活動功労賞も設定し、平成 21 年度からは、従来の活動功労賞を「活動功労賞」と「査読功労賞」に発展的に分割し、貢献のあった会員を手厚く選奨できる体制を採っている。平成 22 年度はソサイエティ論文賞 1 編（先見論文）、活動功労賞 5 名、査読功労賞 5 名を選定し、平成 22 年 6 月 1 日の ISS 新旧交代合同拡大運営委員会開催後に機械振興会館において授賞式を行った。

(4) フェロー称号贈呈及びシニア称号贈呈

12 名の会員へのフェロー称号贈呈、36 名の会員へのシニア会員称号贈呈を決定した。平成 22 年度からは、フェロー称号贈呈式を他ソサイエティと合同でソサイエティ大会時に実施することとなり、平成 22 年 9 月 15 日に大阪府立大学において贈呈式を行った。

(5) 研究会活動

平成 22 年度は、20 の研究専門委員会（前年比 1 増）と八つの時限研究専門委員会により活発な活動を行った。第一種研究会開催総数は 122 回（前年比 101%）、発表総件数は 2,417 件（前年比 102%）であった。なお、平成 23 年度から、マルチメディア情報ハイディング・エンリッチメント研究専門委員会とクラウドネットワークロボット研究専門委員会（ネットワークロボット時限研究専門委員会からの移行）を新設することにし、研究専門委員会の数は 22 になる。また、ネットワークロボット時限研究専門委員会の常設移行に伴い、時限研究専門委員会の数は 1 減の 7 になる。

(6) 論文誌とソサイエティ誌

平成 22 年度に英文論文誌に掲載された論文総数は 400 編（前年比 119%）、和文論文誌に掲載された論文総数は 297 編（前年比 126%）であった。ソサイエティ誌は、年 4 回の定期号に加えて 1 回の特別号を発行し、特別号については全ソサイエティ会員に配布した。

(7) イノベーション創出に係る活動

企業向け活動の一環として平成 22 年 10 月 5 日～9 日に実施された研究会の CEATEC JAPAN 2010 との連携開催に、情報・システムソサイエティからは画像工学、パターン認識・メディア理解、音声、ソフトウェアインタープライズの各研究専門委員会及びネットワークロボット、サービスコンピューティングの各時限研究専門委員会が参加した。

(8) 国際化に係る活動

国際化推進の一環としてパターン認識国際連盟（IAPR: International Association for Pattern Recognition）への本会の加盟申請が決定し、本ソサイエティが申請の準備作業を行うことになった。なお、IAPR の旗艦会議である第 21 回パターン認識国際会議（ICPR2012）をつくば市で本ソサイエティと情報処理学会とで共同主催することが決まっている。この他、平成 22 年度には、国際会議 JCKBSE2010 を共同主催した。

◎ ヒューマンコミュニケーショングループ

HCG は平成 7 年度に発足し今年度で設立 16 年目を迎え

た。設立以来、人とコミュニケーション、情報メディアとコンテンツ、そして福祉と支援、という「人を中心として様々な境界領域の研究」を学際的に幅広く取り上げている。そのため、ソサイエティとは異なり、比較的小規模なグループという組織体系をとることにより、機動性のある分野横断的な活動を基礎的課題から最新のホットな話題に至るまで柔軟にかつ精力的に展開してきている。HCG の今年度の主な活動を以下に示す。

(1) 研究会活動

平成 22 年度は、四つの常設研究専門委員会（第一種研究会開催）、五つの時限研究専門委員会（第二種研究会開催）、及び、三つの時限研究専門委員会（第三種研究会開催）という体制により活発な活動を展開した。なお、第二種研究会を開催していた「脳情報通信時限研究専門委員会（BICT）」は、2010 年 9 月に、医工連携を活発化することに重点を置き第二種研究会を開催する「先端医科学技術研究会（AMST）」に改組した。また、第三種研究会を開催していた「料理メディア研究会（CM）」は、2010 年 12 月に、より広い「食」メディアを扱い第二種研究会を開催する「食メディア時限研究専門委員会」に発展的改組を行った。第一種研究会は各々 5～6 回の研究会を、第二種研究会は 3～6 回の研究会を開催した。

(2) HCG シンポジウムの開催

昨年度に引き続き、研究会の更なる活性化と研究会間の連携を一層深めるため、HCG シンポジウム 2010 を 2010 年 12 月 15 日（水）～17 日（金）に宮崎シーガイアで開催した。口頭発表 68 件、インタラクティブ発表 23 件、招待講演 3 件が行われた。シンポジウム論文集は DVD として発行した。研究分野をまたがるセッションを構成するとともに、持ち時間は一人 5 分でイベント告知やコミュニティ紹介、近況報告、研究紹介などを発表する「Lighting Talk」の企画などを通じて、普段の研究会単位の開催とは異なる交流の機会を設定できた。今後も同様の形態でのシンポジウム開催を継続する予定である。

(3) FIT、総合大会活動

情報科学技術フォーラム（FIT2010）においても主催者側として協力するとともに、HCG 所属の MVE 研究会から、企画「仮想社会と電子書籍～紙の本はなくなるか？～」を実施した。国立国会図書館やグーグル等から講演者を招き、電子書籍と著作権などホットな話題を取り上げ、多くの聴講者から好評を得た。

(4) 論文誌での活動

A 及び D、ED 論文誌ヘリエゾン委員を出して特集号の提案を行った。和文論文誌 D において「ヒューマンコミュニケーション～人間中心の情報環境構築のための要素技術～」特集号を企画し、2011 年 1 月に発行した。また、HCG 所属の CM 研中心に、和文論文誌 A において「料理を取り巻く情報メディア技術」特集号を企画し、論文募集を行った。

(5) 表彰活動

平成 22 年度ヒューマンコミュニケーション（HC）賞の選定を行い、HCG シンポジウム期間中の 12 月 15 日に 5 件の表彰式を行った。本賞は、第一種研究会の発表から、50 件に 1 件を目安に、各研究会で組織した HC 賞審査委員会において選考した。また、HCG シンポジウム 2010 の発表の中から、ベストプレゼンテーション賞 1 件、優秀プレゼンテーション賞 2 件を選出し、表彰した。

(6) 広報活動

昨年度から電子版に変更した HCG ニュースレターを、8 月 19 日と 2 月 14 日の 2 回 HCG のメーリングリストへ配信した。HCG ニュースレターについては、従来の紙媒体の編集スキームを継承していたが、電子版の利点を生かすよう、体裁等の改善を検討している。また、HCG の Web ページを、機能面・管理面・アクセシビリティの観点から見直し、改定作業を進めた。

(7) 情報保障活動

HCG として電子情報通信学会自体が社会へ発信するメッセージの一つとして、情報保障の取組みと普及活動を積極的に行っている。今年度も WIT 研究会において 3 件の情報保障の取組みを実施した。

1. 大会に関する事項 (定款 第 6 条口)

1.1 ソサイエティ大会

下記の期日・会場において基礎・境界、通信、エレクトロニクスの 3 ソサイエティが合同して開催した。

期日 平成 23 年 9 月 14 日 (火)~17 日 (金)

会場 大阪府立大学 中百舌鳥キャンパス (堺市)

参加者 3,198 名

懇親会 大阪府立大学中百舌鳥キャンパス内 学術交流会館
参加者 138 名

(a) 企画セッション数

企画種別	大会委員会	ソサイエティ			合計 (実数)
		基礎・境界	通信	エレクトロニクス	
大会委員会セッション	2	—	—	—	2
ソサイエティ特別企画セッション	—	1	6	1	8
パネルセッション	—	2	6	0	8
チュートリアルセッション	—	3	3	1	7
依頼シンポジウム	—	2	† 4	† 4	6
合計 (共催を含む)	2	8	19	6	31

† 通信とエレクトロニクスの共催企画 1 件を含む。

(b) 公募セッション講演数

	ソサイエティ			合計 (実数)
	基礎・境界	通信	エレクトロニクス	
一般セッション	185	994	352	1,531
シンポジウムセッション	25	106	73	204
合計	210	1,100	425	1,735

1.2 総合大会

下記の期日・会場において 4 ソサイエティ (ヒューマンコミュニケーショングループは基礎・境界ソサイエティに含まれる) が合同して開催を予定していたが、東日本大震災の影響により、総合大会開催を中止した。これに伴い、講演等は以下の扱いと致した。

本大会の講演論文については、オーラル講演と質疑は実施できなかったが、既に公表 (DVD の配布) されていることから、2011 年総合大会講演論文集として発表したものとした。

期日 平成 23 年 3 月 14 日 (月)~17 日 (木)

会場 東京都市大学 世田谷キャンパス (世田谷区)

懇親会 東京都市大学 世田谷キャンパス内 14 号館 学生食堂

(a) 企画セッション数

企画種別	大会委員会	ソサイエティ				合計 (実数)
		基礎・境界	通信	エレクトロニクス	情報・システム	
大会委員会セッション	10	—	—	—	—	10
ソサイエティ特別企画セッション	—	3	* 3	1	* 3	9
パネルセッション	—	1	3	0	1	5
チュートリアルセッション	—	* 3	6	* 3	3	14
依頼シンポジウムセッション	—	‡ 2	‡ 6	3	0	10
合計 (共催を含む)	10	9	18	7	7	48

* 通信と情報・システムの共催企画 1 件を含む。

‡ 基礎・境界とエレクトロニクスの共催企画 1 件を含む。

‡ 基礎・境界と通信の共催企画 1 件を含む。

(b) 公募セッション講演数

	ソサイエティ				合計 (実数)
	基礎・境界	通信	エレクトロニクス	情報・システム	
一般セッション	* 302	1,299	438	386	2,425
シンポジウムセッション	† § 59	§ 135	† 33	18	224
合計	361	1,434	471	404	2,649

* ヒューマンコミュニケーショングループの講演 62 件を含む。

§ 基礎・境界と通信の共催企画 11 件を含む。

† 基礎・境界とエレクトロニクスの共催企画 10 件を含む。

1.3 FIT2010 (第 9 回情報科学技術フォーラム)

下記の期日・会場において情報・システムソサイエティ、ヒューマンコミュニケーショングループ及び情報処理学会が合同して開催した。

期日 平成 22 年 9 月 7 日 (火)~9 日 (木)

会場 九州大学 伊都キャンパス (福岡市)

参加者 1,500 名

懇親会 同キャンパス内 ビックドラ 食堂 参加者 108 名

イベント企画	研究会提案企画	12 課題
	委員会提案企画	1 課題
	現地提案企画	2 課題
査読付き論文		88 講演
一般講演		668 講演

2. 国際会議に関する事項 (定款 第 6 条口、へ)

次のとおり開催した。

会議名	開催年月日	参加者数	論文数	場所	
The 4th International Workshop on Image Media Quality and its Applications (IMQA2010)	2010.5.13~14	57	28	東京	ESS
6th International Symposium on Organic Molecular Electronics (ISOME2010)	2010.6.10~11	65	50	千葉	ES
8th Asia-Pacific Symposium on Information and Telecommunication Technologies (APSITT2010)	2010.06.15~06.18	120	78	Kuching, Malaysia	CS
International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications (ITC-CSCC2010)	2010.7.4~6	455	370	Pattaya, Thailand	ESS

15th OptoElectronics and Communications Conference (OECC2010)	2010.7.5 ～9	566	472	札幌	CS ES
Integrated Circuits and Devices in Vietnam 2010 (ICDV2010)	2010.8.16 ～18	91	32	ベトナム	ES
Joint Conference on Knowledge-Based Software Engineering 2010 (JCKBSE2010)	2010.08.25 ～27	37	29	Kaunas, Lithuania	ISS
2010 International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications. (NOLTA 2010)	2010.9.5 ～8	179	165	Krakow, Poland	ESS
2010 International Workshop on Smart Info-Media Systems in Asia (SISA 2010)	2010.9.8 ～9	76	27	Manila, Philippines	ESS
13th German Japanese Symposium (GJS 2010)	2010.9.13 ～14	177	42	大阪	CS
2010 Asia-Pacific Radio Science Conference (AP-RASC'10)	2010.9.22 ～25	597	536	富山	ES
The 10th International Conference on ITS Telecommunications (ITST2010)	2010.11.9 ～11	101	56	京都	ESS
2010 International Workshop on Security (IWSEC 2010)	2010.11.22 ～24	91	32	神戸	ESS
2010 Asia-Pacific Microwave Conference (APMC2010)	2010.12.7 ～10	984	605	横浜	ES

* その他：総目次 128 ページ，Abstract 142 ページ，Foreword 61 ページ，特集号募集案内等付物 341 ページ

3.3 電子ジャーナル

(1) 基礎・境界ソサイエティ

基礎・境界ソサイエティでは，Web を用いたペーパーレス英文論文誌「Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE (略称 NOLTA)」(年 4 回発行) を 10 月に創刊し，35 件 (うち巻頭言 3 件)，371 ページ (うち巻頭言 3 ページ) を掲載した。

(2) エレクトロニクスソサイエティ

エレクトロニクスソサイエティでは，Web を用いたペーパーレス研究速報英文論文誌「IEICE Electronics Express (略称 ELEX)」(月 2 回発行) に 273 件 (うち巻頭言 2 件)，1,739 ページ (うち巻頭言 8 ページ) を掲載した。

3.4 ニュースレター，ソサイエティ誌の発行状況

各ソサイエティ及びグループでは活動の一環としてニュースレター，ソサイエティ誌を下記のとおり発行した。

(1) 基礎・境界ソサイエティ

ソサイエティ誌 (Fundamentals Review)
4 回 288 ページ

(2) 通信ソサイエティ

マガジン誌 (通信ソサイエティマガジン)
4 回 328 ページ

Global News Letter 4 回 96 ページ

(3) エレクトロニクスソサイエティ

ニュースレター 4 回 36 ページ

(4) 情報・システムソサイエティ

ニュースレター 5 回 112 ページ

(5) ヒューマンコミュニケーショングループ

ニュースレター 2 回 9 ページ

3.5 IEICE Transactions Online

平成 24 年度からの 3 年間のサイトライセンス料金体系を見直した。

3. 出版に関する事項 (定款 第 6 条イ)

3.1 和文論文誌の発行状況

各ソサイエティ別 (A・B・C・D) に 4 種類をオンラインジャーナルで公開し，オプションとして冊子体を次のとおり発行・配布した。

掲載総ページ数は 6,446 ページである。

分類	論文		その他		特集回数 回	発行部数 (冊子体) 部
	件数 ページ数	件数 ページ数	件数 ページ数	件数 ページ数		
A	58	38	—	96	2	9,600
	633	161	142	936		
B	134	26	—	160	6	9,500
	1,430	106	166	1,702		
C	65	21	—	86	2	8,000
	532	78	150	760		
D	244	53	—	297	7	9,700
	2,637	213	198	3,048		
計	501	138	—	639	17	36,800
	5,232	558	656	6,446		

* その他：総目次 55 ページ，巻頭言 21 ページ，英文誌紹介 118 ページ，特集号募集案内等付物 462 ページ

3.2 英文論文誌の発行状況

各ソサイエティ別 (A・B・C・D) に 4 種類をオンラインジャーナルで公開し，オプションとして冊子体を次のとおり発行・配布した。

掲載総ページ数は 12,482 ページである。

分類	Paper	Letter	その他		特集回数 回	発行部数 (冊子体) 部
	件数 ページ数	件数 ページ数	件数 ページ数	件数 ページ数		
A	281	137	—	418	14	7,300
	2,538	556	168	3,262		
B	293	254	—	547	12	8,400
	2,673	1,009	182	3,864		
C	225	35	—	260	12	8,000
	1,524	113	131	1,768		
D	305	95	—	400	14	7,200
	3,025	372	191	3,588		
計	1,104	521	—	1,625	52	30,900
	9,760	2,050	672	12,482		

4. 選奨に関する事項 (定款 第 6 条ホ，へ)

所定の手続きによって選考が進められ，次のとおり各受賞者を決定した。

4.1 基礎・境界ソサイエティ

(1) 特別功労賞

業績	貢献者
ASP-DAC 発展を通じたソサイエティ活動の向上・活性化への著しい貢献	大附辰夫 (早大)

以上 1 名

(2) 功労賞

業績	貢献者
IWSEC 開催および「暗号と情報セキュリティ特集号」編集への貢献	太田和夫 (電通大)
IWSEC 開催および「暗号と情報セキュリティ特集号」編集への貢献	寶木和夫 (日立)
Fundamentals Review 誌の内容の充実と定着に関する貢献	貴家仁志 (首都大東京)

以上 3 名

(3) 功労感謝状

業 績	貢 献 者
「暗号と情報セキュリティ特集号」編集幹事としての貢献	井上大介 (NICT)
英文論文誌編集委員として、多大かつ迅速な編集作業に対する功績	鎌部 浩 (岐阜大)
Fundamentals Review 編集活動への多大な貢献	小西啓治 (阪府大)
暗号と情報セキュリティシンポジウム実行委員長としての貢献	田中俊昭 (KDDI)
信号処理研究専門委員会幹事としての貢献	田中聡久 (東京農工大)
VLSI 設計技術関連の研究会・集会・国際会議などの運営への貢献	戸川 望 (早大)
「暗号と情報セキュリティ特集号」編集幹事としての貢献	松尾真一郎 (NICT)
英文論文誌編集委員として、多大かつ迅速な編集作業に対する功績	李 任剛 (鳥取大)

以上 8 名

4.2 通信ソサイエティ

(1) ソサイエティ論文賞

論 文 名	著 者 名
【優秀論文賞】 確率の変換に基づくインターネット調査手法の解析	田上敦士 (KDDI 研) 佐々木力 (KDDI 研) 長谷川輝之 (KDDI 研) 阿野茂浩 (KDDI 研) 富浦洋一 (九大)
【チュートリアル論文賞】 高分解能到来方向推定のためのアレーキャリアレーション手法	山田寛喜 (新潟大)
【Best Paper Award】 Ethernet Topology Detection from a Single Host without Assistance of Network Nodes or Other Hosts	Yohei HASEGAWA (NEC) Masahiro JIBIKI (NEC)
Increase of Common-Mode Radiation Due to Guard Trace Voltage and Determination of Effective Via-Location	Tohlu MATSUSHIMA (岡山大) Tetsushi WATANABE (岡山県工業技術センター) Yoshitaka TOYOTA (岡山大) Ryuji KOGA (岡山大) Osami WADA (京大)
Frequency Domain Nulling Filter and Turbo Equalizer in Suppression of Interference for One-Cell Reused Single-Carrier TDMA Systems	Chantima SRITIAPEATCH (阪大) Seiichi SAMPEI (阪大)

以上 5 編

4.3 エレクトロニクスソサイエティ

(1) ソサイエティ賞

分 野	業 績	貢 献 者
第 1 分野	CMOS 機能集積センサに関する先駆的な取り組み	川人祥二 (静岡大)
第 2 分野	アレイ導波路回折格子型合分波回路に関する先駆的研究開発	高橋 浩 (NTT) 井上靖之 (NTT) 鈴木麗太 (NTT)
第 3 分野	有機トランジスタを用いた大面積集積回路技術とその応用への先駆的貢献	桜井貴康 (東大) 染谷隆夫 (東大)

以上 3 件

(2) レター論文賞

論 文 名	著 者 名
電極界面での自己組織化による金ナノ粒子集合体の配列制御	中島伸一郎 (日本航空電子) 大西 賢 (日本航空電子)

以上 1 件

(3) ELEX Best Paper Award

論 文 名	著 者 名
Novel multi-core fibers for mode division multiplexing: proposal and design principle	Yasuo Kokubun (Yokohama National Univ.) Masanori Koshiba (Hokkaido Univ.)

以上 1 件

(4) 会長特別表彰

業 績	貢 献 者
エレンソ学生奨励賞の立ち上げへの貢献	鈴木信夫 (東芝)

以上 1 名

(5) エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞

分 野	講 演 者
電磁波・マイクロ波	木田聖治 (龍谷大) 乾 晴恵 (同志社大) 山本綱之 (山口大) 若林 佑 (法政大)
化合物半導体・光エレクトロニクス	小山哲司 (宇都宮大) 畑野舞子 (福井大) 上田悠太 (早大) 高田卓馬 (阪大)
シリコン・エレクトロニクス一般	萬代新悟 (東大) 渥美友裕 (静岡大) 谷口隆哉 (鹿児島大) 宮沢 亮 (東工大)

以上 12 件

4.4 情報・システムソサイエティ

(1) ソサイエティ論文賞

論 文 名	著 者 名
【先見論文】 統計的遅延品質モデル (SDQM) のフィージビリティ評価	佐藤康夫 (STARC) 浜田周治 (STARC) 前田敏行 (STARC) 高取厚夫 (STARC) 野津山泰行 (STARC) 梶原誠司 (九大)

以上 1 編

(2) 功労賞

活動功労賞

業 績	貢 献 者
ソサイエティ誌編集委員及びソサイエティ誌編集企画に関する業績	松田貴典 (阪成蹊大)
和文論文誌編集委員会幹事及び委員としての貢献	中山雅哉 (東大)
英文論文誌編集委員としての貢献	増田 健 (産総研)
音声研究専門委員会幹事, 副委員長, 委員長としての貢献	小林隆夫 (東工大)
画像工学研究会活動への貢献	境田慎一 (NHK)

以上 5 名

査読功労賞

業 績	貢 献 者
論文誌査読委員としての貢献	大町真一郎 (東北大)
論文誌査読委員としての貢献	後藤英昭 (東北大)
論文誌査読委員としての貢献	内田誠一 (九大)
論文誌査読委員としての貢献	天笠俊之 (筑波大)
論文誌査読委員としての貢献	宮崎 純 (奈良先端大)

以上 5 名

(3) 優秀ポスター賞

2011年総合大会の中止により該当者なし。

4.5 FITの各賞

(情報・システムサイエティ及びヒューマンコミュニケーショングループと情報処理学会との合同)

(1) 船井業績賞

業 績	貢 献 者
Defying Gravity: The Art of Tangible Bits 重力に抗して: タンジブルビット	石井 裕 (マサチューセッツ工科大)

以上1件

(2) 船井ベストペーパー賞

論 文 名	受 賞 者
環境配慮型データセンタ向け空調連係IT負荷配置最適化方式	沖津 潤 (日立) 平島陽子 (日立) 朝 康博 (日立) 加藤 猛 (日立) 齋藤達也 (日立)
HTML要素に着目した違法・有害サイト検出手法の提案と評価	池田和史 (KDDI研) 柳原 正 (KDDI研) 松本一則 (KDDI研) 滝嶋康弘 (KDDI研)
高密度情報化を可能とするQRコード符号化方式について	遠藤祐介 (神戸大) 廣友雅徳 (神戸大) 森井昌克 (神戸大)

以上3編

(3) FIT論文賞

論 文 名	受 賞 者
ヘルステアロボットへのパーソナリティ付与による説得効果	中川佳弥子 (ATR/阪大) 篠沢一彦 (ATR) 松村礼央 (ATR/阪大) 石黒 浩 (阪大) 萩田紀博 (ATR)
架空名義操作不可能な施設配置メカニズムの特徴づけ	東藤大樹 (九大) 岩崎 敦 (九大) 横尾 真 (九大)
関数呼び出しの分析による類出学習パターンの導出	谷川紘平 (立命館大) 原田史子 (立命館大) 鳥川博光 (立命館大)
LED Traffic Light Detection Using a High-speed-camera for a Road-to-vehicle Visible Light Communication System	Halpage Chinthaka Nuwandika Premachandra (名大) Mehrdad Panahpour Tehrani (名大) 山里敬也 (名大) 岡田 啓 (埼玉大) 藤井俊彰 (東工大) 谷本正幸 (名大)
架空名義操作不可能な組合せオークションメカニズム: VCGメカニズムの改良	毛利貴之 (九大) 東藤大樹 (九大) 岩崎 敦 (九大) 横尾 真 (九大)
マルチエージェントにより問題空間の分割を行う階層化複素強化学習の検討	山崎惇広 (横浜国大) 濱上知樹 (横浜国大)
植生指標の精度とスペクトル再現性を考慮したハイパースペクトル画像符号化	篠田一馬 (東工大) 村上百合 (東工大) 山口雅浩 (東工大) 大山永昭 (東工大) 小杉幸夫 (東工大)

以上7編

(4) FITヤングリサーチャー賞

候補者名	所属	講演番号	講演タイトル
東藤大樹	九大	RA-007	架空名義操作不可能な施設配置メカニズムの特徴づけ
倉沢 央	東大	D-008	類似検索の高速化を目的としたPivot選択手法の実験評価
武吉朋也	KDDI研	D-016	オンラインディスカッションの健全度定量化手法の提案
内田ゆず	青学大	E-027	幼児の日常生活を収録したビデオデータの分析と名詞概念獲得システム SINCAの評価
毛利貴之	九大	RF-002	架空名義操作不可能な組合せオークションメカニズム: VCGメカニズムの改良
松尾翔平	NTT	I-015	画像局所性を考慮した領域ベース適応補間フィルタ
宮森翔子	和歌山大	J-006	ちょっとした一言の音声認識による子ども利用者判別法の検討
PREMA CHANDRA HALPAGE CHINTHAKA NUWANDIKA	名大	RM-002	LED Traffic Light Detection Using a High-speed-camera for a Road-to-vehicle Visible Light Communication System
岡本雄三	東芝	RM-006	ユーザ状況推定技術を応用した乗換案内アプリケーションの実装と評価
矢田久美子	名工大	RO-005	情報共有を円滑にするための明示的な返信を不要とするコミュニケーションツール
瀬古俊一	NTT	O-011	行動履歴を利用したグループレコメンデーションのためのコンテンツフィルタリング手法

以上11名

4.6 ヒューマンコミュニケーショングループ

(1) ヒューマンコミュニケーション賞

研究会名	業 績	受 賞 者
HCS	コミュニケーションツールの違いによる3者間会話行動に関する研究 (1) 葛藤状況における意思決定の偏り HCS2009-87	松田昌史 (NTT) 八重樫海人 (阪大) 大坊郁夫 (阪大)
HIP	視線変化の知覚—眼を向けることと眼を逸らすこと— HIP2009-127	横山武昌 (神戸大) 喜多伸一 (神戸大)
MVE	無数の画像群の構図に着目したモノクロ画像の自動Colorization MVE2010-20	森本悠嗣 (東大) 苗村 健 (東大)
MVE	聴覚提示を用いた靴型デバイスによる歩行リハビリ活動支援システムの提案と試作 MVE2010-25	久原政彦 (中京大) 山本恭大 (中京大) 遠藤 守 (中京大) 伊藤 誠 (中京大)
WIT	高齢者にも聞きやすい放送番組の音量バランス客観評価技術—聴取音量の影響による高齢者が知覚する放送番組背景音の大きさについて— WIT2010-24	小森智康 (NHK) 都木 徹 (NHK) 黒住幸一 (NHK) 庄田清武 (NHK) 村川一広 (ヤマキ電気)

以上5件

(2) プレゼンテーション賞

業 績	受 賞 者
【ベストプレゼンテーション賞】 主観的な好みに影響されたワーキングメモリの神経基盤	川崎真弘 (理研)
【優秀プレゼンテーション賞】 Twitter BOTのための食事画像の特定メニュー判定	杉山春樹 (東大)
【優秀プレゼンテーション賞】 触覚・視覚・聴覚における「生物らしさ」の周波数依存性	高橋康介 (東大)

以上3件

5. 研究会等に関する事項（定款 第6条ロ、ハ）

5.1 基礎・境界サイエティ

研究専門委員会及び研究会を次のとおり開催した。

研究専門委員会：32回 第一種研究会：98回（うち地方開催52回）

また、第二種研究会、第三種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

注：研究会開催数の（ ）内は地方支部等での開催数

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
回路とシステム	牧野 光則	5 (5)	173
情報理論	植松 友彦	6 (4)	129
信頼性	海生 直人	7 (4)	50
超音波	蜂屋 弘之	11 (1)	124
応用音響	三好 正人	9 (7)	135
非線形問題	土居 伸二	8 (7)	212
VLSI 設計技術	小野澤 晃	6 (4)	162
情報セキュリティ	藤原 融	6 (2)	155
信号処理	池原 雅章	5 (4)	194
ワイドバンドシステム	伊丹 誠	5 (3)	108
コンカレント工学	潮 俊光	4 (4)	83
思考と言語	原田 康也	5 (0)	58
技術と社会・倫理	稲葉 宏幸	5 (3)	116
安全性	稲垣 敏之	6 (0)	35
ITS	加藤 晋	6 (3)	103
スマートインフォメディアシステム	伊藤 良生	4 (1)	76
合計		98 (52)	1,913

5.2 通信サイエティ

研究専門委員会及び研究会を次のとおり開催した。

研究専門委員会：59回 第一種研究会：133回（うち地方開催94回）

また、第二種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
アンテナ・伝播	伊藤 公一	11 (6)	210
宇宙・航行エレクトロニクス	川西 登音夫	10 (5)	178
衛星通信	風間 宏志	5 (5)	93
環境電磁工学	藤原 修	10 (5)	142
ネットワークシステム	木村 丈治	10 (9)	296
情報ネットワーク	鈴木 光	9 (8)	213
通信方式	上田 裕巳	7 (7)	151
電子通信エネルギー技術	石原 好之	6 (2)	65
光通信システム	宮本 裕	7 (6)	120
無線通信システム	大鐘 武雄	9 (7)	319
コミュニケーションクオリティ	吉野 秀明	5 (5)	89
フォトニックネットワーク	岡本 聡	5 (4)	103
光ファイバ応用技術	小倉 邦男	6 (4)	82
情報通信マネジメント	桐葉 佳明	5 (5)	84
モバイルマルチメディア通信	上岡 英史	6 (5)	122
インターネットアーキテクチャ	尾家 祐二	8 (3)	132
ソフトウェア無線	上原 一浩	5 (3)	110
アドホックネットワーク	山本 尚生	5 (3)	113
ユビキタス・センサネットワーク	森川 博之	4 (2)	84
合計		133 (94)	2,706

5.3 エレクトロニクスサイエティ

研究専門委員会及び研究会を次のとおり開催した。

研究専門委員会：24回 第一種研究会：107回（うち地方開催51回）

また、第二種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
機構デバイス	吉田 清	10 (4)	171
磁気記録・情報ストレージ	吉田 和悦	7 (5)	76
超伝導エレクトロニクス	藤巻 朗	4 (0)	45

電子ディスプレイ	藤掛 英夫	7 (1)	85
電子デバイス	橋詰 保	10 (7)	209
電子部品・材料	安井 寛治	10 (6)	150
電磁界理論	小見山 彰	4 (3)	155
シリコン材料・デバイス	遠藤 哲郎	11 (6)	244
マイクロ波	本城 和彦	10 (6)	182
集積回路	内山 邦男	7 (2)	162
有機エレクトロニクス	丸野 透	10 (3)	98
光エレクトロニクス	宇佐見 正士	10 (3)	218
レーザ・量子エレクトロニクス	河口 仁司	7 (5)	175
合計		107 (51)	1,970

5.4 情報・システムサイエティ

研究専門委員会及び研究会を次のとおり開催した。

研究専門委員会：40回 第一種研究会：122回（うち地方開催74回）

また、第二種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
ME とバイオサイバネティクス	板倉 直明	9 (7)	132
ライフインテリジェンスとオフィス情報システム	阿部 匡伸	6 (3)	112
画像工学	甲藤 二郎	9 (6)	226
言語理解とコミュニケーション	那須川 哲哉	4 (2)	68
コンピュータシステム	坂井 修一	6 (4)	126
コンピューテーション	浅野 哲夫	7 (4)	58
人工知能と知識処理	大須賀 昭彦	6 (3)	64
ソフトウェアサイエンス	関 浩之	5 (4)	78
データ工学	石川 佳治	3 (1)	37
パターン認識・メディア理解	美濃 導彦	9 (6)	332
ディペンダブルコンピューティング	米田 友洋	8 (4)	129
ニューロコンピューティング	酒井 宏	7 (6)	218
知能ソフトウェア工学	中谷 多哉子	5 (5)	63
音声	有木 康雄	8 (5)	151
教育工学	渡邊 豊英	9 (6)	147
医用画像	杉本 直三	5 (4)	126
ソフトウェアインタプライズモデリング	宮西 洋太郎	4 (0)	36
リコンフィギャラブルシステム	名古屋 彰	4 (1)	88
情報通信システムセキュリティ	中尾 康二	4 (2)	87
情報論的学習理論と機械学習	山西 健司	4 (1)	139
合計		122 (74)	2,417

5.5 ヒューマンコミュニケーショングループ

研究専門委員会及び研究会を次のとおり開催した。

研究専門委員会：11回 第一種研究会：20回（うち地方開催15回）

また、第二種研究会及び第三種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
ヒューマンコミュニケーション基礎	竹内 勇剛	5 (3)	69
ヒューマン情報処理	大西 仁	5 (5)	103
マルチメディア・仮想環境基礎	苗村 健	5 (4)	195
福祉情報工学	渡辺 哲也	5 (3)	81
合計		20 (15)	448

6. データベースに関する事項（定款 第6条へ）

国立情報学研究所 (NII) 並びに、科学技術振興機構 (JST) のデータベース作成に次のとおり協力した。

CiNii (NII)：発行から2年後に全文を公開

会誌、和・英論文誌、技術研究報告、総合大会発表論文、サイエティ大会発表論文

J-Dream II (JST)：抄録のみ公開

会誌、和文論文誌、技術研究報告、総合大会発表論文、サイエティ大会発表論文

7. ソサイエティ及びグループ会員に関する事項
(定款 第3章)

各ソサイエティ及びグループにおける会員数は次のとおりである。

上段：年度末会員数 [] 内はフェロー会員数

下段：() 内は当年度会費未納者を除いた年度末会員数

	ESS	CS	ES	ISS	HCG	合 計
平成 21 年度 末登録数	6,856[120] (6,447)	12,808[245] (11,892)	7,217[141] (6,766)	12,194[202] (11,404)	990 (976)	40,065[708] (37,485)
平成 22 年度 末登録数	6,644[125] (6,255)	12,596[258] (11,625)	7,064[145] (6,670)	12,160[213] (11,228)	963 (937)	39,427[741] (36,715)
前年度との 差	-212[5] (-192)	-212[13] (-267)	-153[4] (-96)	-34[11] (-176)	-27 (-39)	-638[33] (-770)

(注) ESS：基礎・境界ソサイエティ，CS：通信ソサイエティ，ES：エレクトロニクスソサイエティ，ISS：情報・システムソサイエティ
HCG：ヒューマンコミュニケーショングループ

Ⅲ. 支 部 事 業

各支部において、講演会、講習会、見学会、大会等を次のとおり開催した。

1. 北海道支部

講演会	7回	学生会講演会	5回
支部連合大会	1回	学生会見学会	2回
研究会	38回	学生ランチ講演会	1回
専門講習会	0回	学生会研究発表会	1回

2. 東北支部

学術講演会	16回	支部連合大会	1回
地区講演会	5回	研究会	37回
特別講演会	2回	小中高生向け事業	3回
専門講習会	1回	学生向け見学会	1回

3. 東京支部

講演会	5回	研究会	189回
シンポジウム	2回	学生会講演会	2回
地域イベント	5回	学生会見学会	2回
見学会	1回	学生会報の発行	1回
教育活動	8回		

4. 信越支部

講演会	9回	支部大会	1回
専門講習会	1回	研究会	8回
見学会	4回		

5. 東海支部

講演会	4回	研究会	27回
専門講習会	1回	学生会講演会	5回
見学会	1回	学生会見学会	2回
支部連合大会	1回	卒業研究発表会	1回

6. 北陸支部

特別講演会	1回	研究会	12回
講演会	8回	学生会講演会	7回
見学会	1回	学生研究発表会	1回
支部連合大会	1回		

7. 関西支部

講演会	3回	研究会	53回
中高生向け講演会	1回	ICT基礎講座	3回
専門講習会	1回	学生会見学会	1回
見学会	1回	学生会研究発表講演会	1回
支部連合大会	1回		

8. 中国支部

講演会	13回	研究会	14回
専門講習会	4回	学生向け講演会	5回
支部連合大会	1回	学生向け見学会	5回
見学会	2回		

9. 四国支部

講演会	21回	学生会講演会	12回
専門講習会	4回	学生会展示会	3回
支部連合大会	1回	学生会見学会	2回
研究会	15回		

10. 九州支部

特別講演会	1回	研究会	74回
講演会	12回	学生会講演会	1回
専門講習会	1回	学生会見学会	1回
支部連合大会	1回	普及啓発活動	1回
ワークショップ	1回	(シンポジウム)	

役員、評議員及び代議員の改選結果報告

平成 23 年度の役員、評議員、代議員の改選は所定の手続きによって行われた。平成 23 年 2 月 10 日に正員に投票を依頼し、3 月 1 日に締め切り、その開票結果を理事会に諮り当選者を決定した。この結果、理事津田俊隆、原島 博、小柴正則、中沢正隆、桑原秀夫、三宅 功、大石進一、安達文幸、松嶋敏泰、並木淳治、板屋義夫、横矢直和、及び監事羽深龍二は退任することになり、新たに吉田 進、喜連川優、間瀬憲一、西原明法、小林岳彦、斎藤 洋、本島邦明、佐々木 繁、山本博資、田中良明、荒木純道、萩田紀博が理事に、木戸出正継が監事に就任することになった。

また、役員・評議員は選出代議員となる。

なお、本日の通常総会において退任、留任、新任される役員・評議員・代議員は次のとおりである。

役 職 名	退 任	留 任	新 任
会 長	津田 俊隆		安田 浩
次 期 会 長	安田 浩		吉田 進
副 会 長 (在京)	原島 博	中嶋 信生	喜連川 優
副 会 長 (地方)	小柴 正則	北山 研一	間瀬 憲一
総 務 理 事	中沢 正隆	江村 克己	西原 明法
会 計 理 事	桑原 秀夫	太田 直久	小林 岳彦
編 集 理 事	三宅 功	今井 浩	斎藤 洋
企 画 理 事	大石 進一	澤田 寛	本島 邦明
調 査 理 事	安達 文幸	荒川 薫	佐々木 繁
編 集 長 (理事)		酒井 善則	
企 画 室 長 (理事)		持田 侑宏	
規格調査会委員長 (理事)		三木 哲也	(次期会長)
ESS 会長 (理事)	松嶋 敏泰	貴家 仁志	山本 博資
CS 会長 (理事)	並木 淳治	萩本 和男	田中 良明
ES 会長 (理事)	板屋 義夫	小山二三夫	荒木 純道
ISS 会長 (理事)	横矢 直和	石田 亨	萩田 紀博
監 事	羽深 龍二	村上 篤道	木戸出正継
評 議 員 (在京)	大森 慎吾	市川 晴久	大橋 弘美
〃	唐沢 好男	茨木 久	桑原 秀夫

〃	喜連川 優	坂庭 好一	森川 博之
〃	河村 仙志	田中 良明	保田 佳之
〃	村瀬 淳	弓場 英明	吉田万貴子
評 議 員 (地方)	大橋 正良	尾家 祐二	浅井光太郎
〃	三瓶 政一	大柴小枝子	安達 文幸
〃	白鳥 則郎	佐藤 健一	大橋 正良
〃	守倉 正博	山田 敬嗣	小柴 正則
〃	安浦 寛人	山本 幹	林 秀樹
〃	小川 賀代		野島 俊雄
定款第 22 条評議員	(荒川 義幸)		
〃	宮部 義幸		畑岡 信夫
〃	(古池 進)		山中 直明
〃	田中 豊		西川 訓利
〃	趙 晋輝		畔上 修一
〃	土井美和子		矢野 厚
〃	富田 義数		渡邊 敏正
〃	林 秀樹		服部 哲郎
〃	藤巻 健一		
〃	(福沢 恵司)		吉田 啓二
〃	浅井光太郎		真田 博文
〃	(村上 篤道)		永田 仁史
〃	ZHISHENG NIU		藤吉 正明
〃			森迫 昭光
〃			増山 繁
〃			奥田 篤士
〃			大橋 正治
〃			岡村 寛之
〃			中川 清
〃			千住 智信
評議員	野島 俊雄		前田 純治
〃	北海道支部長		作山 裕樹
〃	東北支部長		*森川 博之
〃	東京支部長		佐々木修己
〃	信越支部長		藤原 修
〃	東海支部長		堀 俊和
〃	北陸支部長		高橋 達郎
〃	関西支部長		羽野 光夫
〃	中国支部長		中野 好典
〃	四国支部長		山本 浩之
〃	九州支部長		
評議員 (学生会顧問)	吉田 啓二		
〃	北海道支部		高橋 庸夫
〃	東北支部		磯田 陽次
〃	東京支部		藤吉 茂樹
〃	信越支部		林 貴宏
〃	東海支部		桜井 優
〃	北陸支部		末光 厚夫
〃	関西支部		山下 洋一
〃	中国支部		市原 英行
〃	四国支部		吉田 真一
〃	九州支部		中島 誠

備考：() 内は年度の途中において交代した前任者を示す。
 注意：*印は既に選挙で選出された理事または評議員であるため、定款第 22 条評議員にはしない者。

役 職 名	退 任	留 任	新 任
互選代議員	安達 淳	生駒 哲一	青木 正憲
〃	伊藤 哲郎	伊藤 正人	朝香 卓也
〃	井上 浩	上野 敦志	新井 宏之
〃	宇津呂 武仁	梅田久仁夫	荒川 太郎
〃	榎木 孝知	梅田 幹雄	荒木 智行
〃	大塚 作一	大寺 康夫	伊賀崎 伴彦
〃	大橋 正良	岡本 一泰	伊藤 靖朗
〃	尾澤 勉	岡本 龍明	伊藤 哲郎
〃	梶 明夫	奥田 充紀	岩城 護
〃	菅 隆志	奥村 幸彦	榎原 晃
〃	菊島 浩二	加賀田 俊	大塚 作一
〃	北村 敏明	金寺 登	大平 孝
〃	小久保 優	岸原 充佳	大森 崇弘
〃	小柴 正則	北島 博之	岡 育生
〃	小林 博文	齋藤 晋聖	岡本 英二
〃	榊原久二男	酒井 清秀	尾澤 勉
〃	佐々木宣介	坂上 勝彦	金田 和文
〃	佐藤 栄一	榊 敏明	川又 憲
〃	島本 隆	桜井 優	北形 元
〃	菅沼 拓夫	酒匂 裕	北原 格
〃	瀬濤 喜信	塩谷 浩之	北原 義典
〃	津田 裕之	津浦 忠男	杉浦 孝之
〃	中尾 剛	高田 喜朗	佐々木宣介
〃	中川 健治	田中 久陽	佐藤 栄一
〃	中川 範	田中 秀和	沢田 進
〃	西田 泰伸	都築 伸二	鹿間 敏弘
〃	林 崇文	戸島 秀喜	地主 創
〃	原 肇	中尾 光之	島本 隆
〃	福迫 武	中島 剛司	曾根高則
〃	福村 好美	中野 敬介	高嶋 寛人
〃	藤田 聡	波平 宣哉	武田 一哉
〃	舟生日出男	野口 周一	田中 達治
〃	増山 繁	橋場 寛之	田村 裕
〃	松下 雅仁	長谷川 浩	丹治 裕一
〃	松下 弘成	林田 行雄	佳典
〃	松永 昭一	平山 信次	内藤 崇男
〃	松山 光司	前田 義信	永田 真誠
〃	美濃 導彦	松永 裕介	中村 誠
〃	武藤 聡	真鍋 佳嗣	橋橋 祥一
〃	村瀬 洋	宮本 智之	野島 俊雄
〃	守屋 宣	山田 寛	野村 亮
〃	安家 武	横田 光広	葉玉 寿弥
〃	山本 真行	若山 浩二	藤元 美俊
〃	渡辺 壮一	和田 和	細田 陽介
〃			堀 修
〃			松永 昭一
〃			水落 隆司
〃			溝湖 昭二
〃			三好 誠司
〃			武川 直樹
〃			村田 嘉利
〃			村松 正吾
〃			森野 博章
〃			米田 友洋